

# 真夜中の叫び

## 第4部：『見張り人』

by 橋川真理

### 備えよ

毎年4月15日は、アメリカ連邦政府と州政府に、確定申告の書類を提出する締め切り日です。最近ではインターネットで電子ファイルを利用することが可能になっていますが、かつては郵送が一般的でした。4月15日の締め切りまでの消印がないと滞納とみなされてしまうため、なんとか間に合わそうと、その日はギリギリの申告者が大勢郵便局に押しかけていました。当日はそういう人々のために、郵便局は特別に夜遅くまで開いていたのです。長い列に並んでいる人々をニュースで見るたびに、締め切りの日が分かっていたのに、何故もっと早くからとりかからなかったのだろうか…と思っていました。

ふと、学生時代のことを思い出しませんか？ 期末テストの日付が分かっていたのに、そして、そのための勉強を今きちんとしておかないと芳しくない成績になってしまうことを知っていたのに、楽しいテレビ番組をついつい毎日見過ぎてしまい、思い通りの試験勉強ができなかった…ということはなかったでしょうか？ 親から何度も促され、自分でも今度こそは準備をしておかなければ…という気持ちはあっても、いつもギリギリになるまでとりかかれなかった。頭では分かっていたのに、何故いつもそうだったのでしょうか？ それは、個人の性格、習慣、価値観などによるものである、という人もいます。でも、自分の愚かな選択がもたらした失敗を過去に何度も経験しているはずなのに、案外、現在やるべき準備を怠ることで将来生じる結果を、私たちは軽く見過ぎていたということもあったのではないのでしょうか。

今日備えを怠れば、明日は必ずその結果が生じる…これは、人間にとってどうにもならない現実です。何の準備もせずに畑をほおっておけば、自然と雑草の種が蒔かれてしまい、豊かな収穫は全く期待できません。それと同じように、私たちの“霊的な畑”においても、「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。すなわち、自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り、霊にまく者は、霊から永遠のいのちを刈り取

るであろう（ガラテヤ 6:7～8）」と聖書にあります。

私たちは、終末時代に全人類が受けねばならない最後のテストがあることを、神さまから何度も示されて知っています。そのために、黙示録 14 章の三天使のメッセージを世に伝える責任があることも前もって神さまから示されていて、それこそが、6 節にある「永遠の福音」であることは SDA なら誰でも知っています。更に、そのテストがやってくる頃は、今まで誰もが経験をしたことのない程大変な世の中になるので、そのための準備もしておくようにと、何年もの長い信仰生活の間、聖書と証の書を用いたメッセージをとおして勧告されてきました。しかし、私たちは、まるでこれから何事も起らないかのように多忙なスケジュールに毎日追われっぱなしであったり、昨日も今日もテレビや携帯・インターネットに時間を費やした生活をしているのではないのでしょうか。準備がほとんどできていない理由の一つは、先のことへのリアル感や危機感が、私たちに欠如しているからだと思ったりします。究極のところ、“十人のおとめ”は人生の縮図であるといえるかもしれません。第 1 部でみたように、“十人のおとめ”の譬えは、人生最後で最も重要な準備をする人と、怠る人の描写だからです。

余りにもぬるま湯にどっぷり浸かっている私たちの今の生活に、リアル感や危機感が少しでも持てるように、どのような恐ろしい嵐の中で私たちは人生最後のテストを受けるのかを、まずここで見ておきましょう。

「大いなる叫び」が叫ばれる頃の世界の状況は、今の私たちの想像をはるかに超える地震、洪水、たつ巻、干ばつなど大災害に襲われ、悪に満ちた大都市では混乱や暴動が頻繁に起り、神の裁きに見舞われる状態が証の書に描かれています。それまでに、私たちは田舎に移り住んでいるべきだとも勧告しています。「もうしばらくすれば、都会に混乱と紛争が起り、都会を出たいと望む者たちが出られなくなる時が来る。私たちはこれらの問題に備えなければならない」（Country Living 11 頁）。各国の財政は破綻、都会には失業者が溢れているような状況の中で、アメリカ国内の保守的な人々や教会から、「神は怒っておられる。私たちは日曜日にはきちんと教会で礼拝をし、主の日を守らなくてはならない」という悲痛な叫びが各地で上がり、それが国会議員たちを動かし、日曜休業令の法案の成立となります。そういったことを、私たちは長年学んできました。それらのいくつかを証の書から見ておきましょう。

### 大争闘下「破滅への道」より（352 頁）

「すなわち、主は地上から祝福を取り去り、神の律法に反逆している者たち《註：この箇所から、すでに日曜休業令がでた後だとわかります》、また人にそうするように教

えたり強制したりしている者たち《註：日曜休業令を強制したり、守るように教えたりしていることがわかります》から、保護のみ手を取り除かれるであろう。サタンは、神が特に保護されないすべての者に対する支配力を持っている。彼は、自分のたくらみを押し進めるために、ある者たちには恩恵と繁栄を与える《註：繁栄している人たちがまだこの頃にいることもわかります》。そして、他の者たちには災いをもたらして、人々に、彼らを悩ませているのは神だと信じさせようとする。サタンは人々に対し、あらゆる病気をいやすことのできる偉大な医師のようにみせかけながら、他方では病気や災害を生じさせ、ついには人口の多い都市が破滅して荒廃する。彼は今も活動している。海や陸における事故や災害、大火災、激しい突風、すさまじい降雹、あらし、洪水、たつまき、津波、地震など、あらゆる場所に幾多の形でサタンは力をふるっている《註：日曜休業令がでる前の今もすでにサタンは力をふるっていることがここでわかります》。彼は取り入れまぎわの収穫を全滅させ、ききんと困窮を引き起こす。彼は空気を恐るべきウイルスで汚染させ、幾千もの人が悪疫で死ぬ。これらのできごとはますますひんぱんになり、悲惨なものになる。破滅は人間にも、動物にもおよぶ。『地は悲しみ、衰え、…天も地と共にしおれはてる。地はその住む民の下に汚された。これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ《註：第4条を変更し、律法にそむくことをイザヤも預言しています》。』（イザヤ書 24:4、5）

こういう状況下を、証の書は「小さな悩みの時」と呼んでいます。それは日曜休業令が出てから恩恵期間が閉じるまでの期間をいいます（これについては、『真夜中の叫び・第1部』の32-35頁でもふれました）。その期間、「後の雨」を受ける私たちが、三天使のメッセージを叫ぶのが「大いなる叫び」です。アメリカを始め、ヨーロッパ・アジア・アフリカなど世界各国にいるあらゆる宗教団体の人たちが、そのメッセージを初めて聞き、真理を受け入れて、私たちの大運動に加わってきます。それらの人々も収穫を実らせる「後の雨」を受け、私たちと共に品性は完全に成熟していくのです。ホワイト夫人は、**大争闘**、**生き残る人々**、**初代文集**…などでこの頃のことを詳しく描写されていますので、そのあたりのところを、もう少し証の書から引用しておきます。

### 大争闘下 381~382 頁

「第三天使の使命の宣布に協力する天使は、その栄光で全地を照らすのである。ここに、全世界的で比類のない力をもった働きが予告されている。1840年から44年に至る再臨運動は、神の力の輝かしいあらわれであった。第一天使の使命は、世界の各伝道地に伝えられた。そしてある国々においては、16世紀の宗教改革以来どの国にもなかったような大いなる宗教的関心が引き起こされた。しかし、第三天使の最後の警告下

における**大運動**は、これをはるかに超えるものとなるのである。その働きは、ペンテコステの日の働きに似ている。福音の開始にあたって、貴重な種を発芽させるために、聖霊が注がれて『前の雨』が与えられたように、その終わりにおいて、収穫を实らせるために、『後の雨』が与えられるのである。…（ホセア 6:3、ヨエル 2:23、使徒 2:17、21 を引用）福音の大いなる働きは、その開始を示した神の力のあらわれより劣るもので終わることはない。福音の開始にあたって秋の雨（前の雨）となって成就した預言は、その終局において、春の雨（後の雨）となって再び成就するのである。」

### 生き残る人々451 頁

「大いなる奇跡が行われ、病人がいやされ、信ずる者にしるしとふしぎなわざが伴った。その働きの中には、神がいましたもうた。聖徒たちはみな、結果を恐れることなく自己の良心の確信にしたがい、神のすべての誠めを守っている人々と一体となって、第三天使の使命を広く力強く叫んだ。わたしは、この使命が**夜半の叫び**（註：原文では **midnight cry=真夜中の叫び**）に、はるかにまさる力と勢いをもって閉じられるのを見た。天からの力をさずけられた神の僕たちは、聖なる献身の念に顔を照り輝かせながら、天来の使命を伝えに出て行った。**あらゆる宗教団体の中にちらばっていた魂は呼び声に応じた。**そしてちょうど、ロトが滅亡前のソドムから急いで出たように、とうとい僕たちが運命づけられた教会から急いで出た。天来の栄光は神の民の上に豊かにとどまって、誘惑のときに耐え忍ぶ備えをさせた。彼らはその大いなる栄光によって力づけられた。いたるところで、多くの群集が『神の誠めとイエスを信ずる信仰とを守る聖徒の忍耐はここにあり』と言っている声が聞かれた。（黙 14:12）」

### 初代文集「大いなる叫び」より 448~449 頁

「第二の天使によって与えられた、バビロンが倒れたという使命は、1844 年以來教会に入りこんでいる**墮落**についての警告がつけ加えられて、くりかえされている。この天使の働きは、最後の**大いなる働き**において第三天使の使命が**大いなる叫び**となってもりあがるちょうどその時に始められる。… 大いなる力をもったこの天使をたすけるために、天から天使たちがつかわされた。そして『わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。彼女の罪は積り積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる』と叫んでいる声が、いたるところにきかれた。1844 年に第二天使の使命に**夜中の叫び**が合流したように、この使命は、第三天使の使命に追加されて一緒になったもののようであった。… 諸教会の中で、幾らかでも光を持っている人々や、三重の使命を聞いてこれを拒まなかった人々は、呼び声に応じて、墮落した教会を離れた。」

「あらゆる宗教団体の中にちらばっていた魂は呼び声に応じた」とか「諸教会の中で、幾らかでも光をもっている人々や、三重の使命を聞いてこれを拒まなかった人々は、呼び声に応じて、墮落した教会を離れた」と引用文にあるように、墮落した諸教会から大勢の人たちが出て来るのは、この「大いなる叫び」の時なのです。いつの時代にも他の宗教団体から出てくる人々はいましたし、現在でも日曜教会などの人たちが真理を受け入れて SDA になっています。しかし、日曜休業令がアメリカに出てからは、規模が全く違います。大きなムーヴメントとして出てくるのは、引用文にあるように日曜休業令のあとの「大いなる叫び」の時なのです。

その頃になると大恐慌や大災害に苦しみあえいでいるだけでなく、神の民は信仰を放棄するか否か…という究極の決断を下すところまで追い詰める迫害や投獄が推進される様子が次の箇所にも書かれています。そこには SDA の多くの信徒が、信仰を棄てて真理から離れて行くことも書かれています。

#### 大争闘下 38 章の「世界への最後の警告」より 377~378 頁

「教会は、政権の強大な権力に訴える。そして、この働きにおいて、カトリックとプロテスタントは提携する。日曜休業運動が、ますます大胆に、ますます断固として推進されるにつれて、戒めを守る人々に対して法令が發布される。彼らは、罰金と投獄をもって脅かされる。そして、ある者は有力な地位によって、また他の者は報賞や便宜の提供によって、信仰を放棄するように勧誘される。しかし彼らは、断固として、『われわれが誤っていることを神の言葉によって示してほしい』と答えるのである。これは、同様の状況の下でルターが行なったのと同じ訴えである。法廷に呼び出された者たちは、真理の力強い弁明をする。そしてそれを聞く者の中には、神のすべての戒めを守るという立場をとるよう導かれる者が出てくる。こうして、他の方法ではこれらの真理を知ることができない幾千という人々の前に、光がもたらせるのである。… (378 頁) あらしが迫って来るとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者が、その信仰を棄てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっていく。そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般受けする側を選ぶのである。かつては真理を喜んだところの、才能ある雄弁な人々は、その力を用いて他の人々を欺き迷わす。彼らは、以前の兄弟たちにとって、最も苦い敵となる。… この迫害の時に、主のしもべたちの信仰が試みられる。」

## Bible Commentary 7 卷 977 頁・スタディーバイブル新約 587 頁

“And all who prove their loyalty by obedience to the law of Jehovah must be prepared to be arrested, to be brought before councils that have not for their standard the high and holy law of God.”

「そして、エホバの律法に従うことによって忠誠を証明するすべての人々は、逮捕され、神の高い、聖なる律法を標準として持ち合わせていない議会の前に連れて行かれる覚悟をしておかなければならない。」

日本語訳では、「覚悟」となっていますが、原文では“be prepared to be arrested”  
「逮捕される準備・用意をしておく」とあります。

すなわち、神さまに忠誠を証明するすべての SDA たちは、逮捕されて議会の前に立たされるかもしれないことを一応覚悟して、聖書から真理を議会や法廷で力強く語ることができるように“準備”を今するべきである…と、神さまはおっしゃっておられるのです。

《でもマタイ 10:19~20 には、「彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にある父の霊である」という素晴らしい約束があるではありませんか。だから準備する必要はないのでは?》と言う声も聞きます。しかし、この聖句では、「準備しないがよい」ではなく、「心配しないがよい」と、イエスさまご自身が語られました。

更にイエスさまは、「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう (ヨハネ 14:26)」とおっしゃっています。私たちが前もってみ言葉を読み、聖霊さまに真理を教えていただかないと、必要な時に聖霊さまの力によって思い出すことはできません。今こそが、すべての真理を教えていただく準備期間なのです。第 1 ペテロ 3:15 にも「また、あなたがたのうちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明できる用意をしておきなさい」とあります。その用意の一環として、私たちは『真夜中の叫び』シリーズで、とても貴重な真理を学んでいるのです。

「小さな悩みの時」の状況下で第三天使のメッセージが叫ばれる「大いなる叫び」について見てきましたが、もし、私たちが現代の真理を正確に理解していなければ、間違った、偽りのメッセージを宣べ伝えることになります。ヨハネ 14:17 には「真理の御霊」とあり、神さまからのものでない偽りのメッセージは、真の「大いなる叫び」

ではないのです。更に、真理によってのみ、私たちは聖別され、清められるのです（ヨハネ 17:17）。ですから、サタンは当然真理を常に攻撃してきます。

現在でも「今、墮落した SDA 教会から出て来ないと救われません」「生ける者の裁きはもう始まっています」とか、一方では「聖所の教理を知る必要はもうありません」「カトリック教会は昔と変わりました」（大争闘下 35 章「良心の自由の危機」を是非お読みください）など、SDA の基本的な真理とは違う教えがあちこちで説かれています。更に、「後の雨と品性の完成は、いつ起るのでしょうか？」「印されるのは、いつでしょうか？」「最後のテストは、いつ終了するのですか？」「恩恵期間は、いつ閉じられるのでしょうか？」…などの質問に、単なる自分の考えや意見ではなく、み言葉をもとに答えられるのでしょうか？いろいろな教えの風が吹き荒れているなか、再臨直前に関するこれらの真理も、この際しっかりと学んでおこうということで、『真夜中の叫び』シリーズは、第 5 部まで続きます。最終章・第 5 部では、アメリカから始まって世界に広がっていく日曜休業令など、み言葉に記されている主な出来事のタイミングが、はっきりと理解できるようになることを目的に、学びを進めて行きます。

「大いなる叫び」は、真理によって清められ、真理のもとで一致した人々によって力強く宣べ伝えられるのです。ですから、現代の真理をしっかりと、聖書と証の書から理解しておくことは、私たちにとっては非常に重要なこととなります。それを怠りますと、ホワイト夫人の最初の幻にありましたように、私たちも“思慮の浅いおとめ”たちのようになってしまいます。彼らは、後ろから照っていた「真夜中の叫び」の光を拒んだために、その光は消えて足元は真っ暗になり、彼らはつまずき、目標とイエスさまを見失って、道から暗い邪悪な地上へと落ちていきました。

ところで、私たちは、神さまから“覆い(covering)”をいただくことをご存知でしょうか？ その“覆い”は、真理に堅く立っていないと受けられないのです。この“覆い”というのは、印する働きと深い関連があることが下記の幻で分かります。神の印については、第 5 部で詳しく学びます。

### 初代文集 107-109 頁

「今や、サタンはこの印する働きのときに当たり、あらゆる手段を用いて神の民の心を現代の真理から引き離し、彼らを迷わせようとしている。わたしは、神が悩みのときに神の民を守るために、彼らの上にかけておられる覆いを見た。そして、真理の側に立つ心の清い者は、全能の神の覆いに隠されるのであった。…（108 頁）ある人々は現代の真理に堅く立っていないのをわたしは見た。彼らは真理にしっかりと立ってい

なかったので、彼のひざは震え、彼らの足は滑べっていた。そして、彼らがこのように震えている間は、全能の神の覆いが彼らにかけられなかったのである。サタンは印する働きが終わり、神の民のうえに覆いがかけられるまで、彼らをそのままの状態にしておき、最後の七つの災いが下るときに、神の燃える怒りを彼らが避けることができないようにさせようと、あらゆる策を弄していた。神はこの覆いを神の民の上にかけて始められた。そしてそれは、ほふられる日に避け所が与えられるすべての者の上にも間もなくかけられる。神は神の民のために力強く働かれる。そしてサタンも働くことが許されるのである。」

真理を信じることについて、重要なポイントがあります。真理を理論的に知り、教理にただ同意することが義ではないのです。そのことは、キリストの時代の人々の心にあった最大の欺瞞でもあり、同じ危険が今も存在しています。真理を心から愛し、真理を実生活に持ちこみ、その真理による清めをとおして与えられる力と恩恵を受けて、義の実を生じることが大切です（各時代の希望中 16 頁）。つまり、知的にも霊的にも、両方の足でバランス良く真理に堅く立つことが必要なのです。片方だけでは、教理の風が吹き荒れるなか足は滑ってしまい、転びやすくなってしまいます。

#### 結論：

私たちは、まもなくやってくる状況をできるだけ現実感をもって認識しておく必要があります。だからこそ、神さまは証の書をとおして私たちに何度も警告されているのです。世界の各地で次々と起る地震や干ばつなどの大災害や世界の大不況のもとで、多くの人々は仕事を失いますので、家のローンは払えなくなり、家を失っていきます。また預金が十分にあると思っても、ハイパー・インフレーション（大恐慌）で金の価値がほとんどなくなる可能性もあります。そういう大恐慌の混乱の中において、この世の人々は憔悴しきって、“最後の神頼み”の状態に追い込まれていき、今までほとんど興味を示してこなかった“神”に関心を持つようになります。聖書を学んできた私たちも、彼らと同じ大恐慌と大災害の渦の中において、多くの信徒が狂信に走ったり、間違った教えを説いたり、また罰則や迫害を恐れるあまり、信仰を棄てて日曜礼拝に参加するようになります。しかし、神に対する忠誠を示す人々は、刻々と勢いを増す迫害の中、神さまのみ言葉から真理を力強く叫びます。これこそが、「大いなる叫び」なのです。

そのような時代がついそこまで来ているということを信じているはずの私たちですが、まだ物が溢れている豊かで平和な世の中であって、なかなか現実感をもって備えをしていない状態です。人々への伝道に、また法廷での証言に、私たちは聖書だけを用以



て真理を力強く語るができるように、準備をしていなければならないのです。もちろん、「大いなる叫び」に不可欠な「後の雨」という特別な力を与えてくださるのは神さまです。しかし、その「後の雨」を受けるための備えも必要です。更に、神さまのみ言葉から真理を力強く叫ぶためには、それなりの覚悟と信仰が欠かせません。その準備をするのは、“今”であることを、証の書は何度も何度も警告しています。その中の一つが、誰もが知っている次の有名な勧告です。

### 初代文集 222～224 頁

「わたしは、残りの民が、この地上に起ろうとしていることのために、準備をしていないのを見た。最後の使命を持っているという信仰を公言する人々の大部分は、昏睡状態のような無感覚に陥っている。わたしと一緒にいた天使は、非常な厳粛さをもって叫んだ。『準備せよ、準備せよ、準備せよ。神の恐ろしい怒りが間もなく臨もうとしている。神の怒りは、あわれみを混じえないで、注がれようとしている。それなのに、あなたがたは準備ができていない。衣を裂かないで、心を裂きなさい。残りの民のために、大いなる働きがなされなければならない。彼らの多くは、小さい試練に心を奪われている』。天使は、また言った。『悪天使の軍勢が、あなたがたの回りにいて、あなたがたをわなにかけて捕らえるため、その恐ろしい暗黒を忍びこませようとしている。あなたがたは、準備の働きと、この最後の時代のために何よりも重要な真理から簡単に心をそらせてしまう。そして、あなたがたは、小さな試練に心を奪われている。そして、ちょっとした困難の細かな点まで、だれかれの満足を得るために説明しようとしている』。」

## 未来の出来事

第3部では、黙示録10章に記されている「右足を海の上に、左足を地の上に踏みおろして」という描写は、全地を絶大な力と権威で支配されるイエス・キリストが、サタンとの大争闘の終結の場面において果たそうとしている働きを示していることを学びました。この終結の場面は、まだこれから将来に向けて起る出来事です。更に、この終結の場面になされる最後の働きにおいて、神の民が再臨に関する真理を宣言して尊い使命を果たすことも学びました。これこそが、黙示録10章の大きなテーマです。

黙示録 10 章にある「七つの雷が語った」出来事は、もうすべて過去において完全に成就され、将来に起る出来事とは無関係だ…という解釈があります。しかし、パイオニア時代の「真夜中の叫び」においての使命は一旦果たされましたが、終末時代に「大いなる叫び」として再び再臨に関する真理が全世界に伝えられ、過去にも成された神さまの働きは、大争闘の終結の場面で繰り返されることを私たちは学んできました。

三天使のメッセージは、過去 170 年近くもの間ずっと伝えられてきました。そして現在も様々な方法で伝道が行なわれています。しかし、三天使の使命が最後の福音として宣べ伝えられる「大いなる叫び」では、今までかつてなかったような力強い、輝かしい再臨運動が世界中に広がるのが預言されています。その最後の「大いなる叫び」の働きでは、真理を基として結束した神の民が、再臨に関する光を宣言し尊い使命を果たすのです。

パイオニア時代の「真夜中の叫び」において与えられた使命は、それまで封じられていた「小さな巻物」であるダニエル書 8:14にある 2300 日に関するメッセージで、第一天使の使命である「神のさばきの時がきた」という部分でした。

終末時代に「大いなる叫び」として伝えられる再臨に関する真理は、黙示録 14:7に記されている「天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」という部分のメッセージです。すなわち、獣とその像の刻印（日曜日）を受けず、創造主であられる真の神さまを七日目の安息日に礼拝しましょう…という三天使の使命を伝えることこそが、私たち SDA の役目なのです。その最後の福音を伝えるために必要な光が、終末時代に開示される「小さな巻物」・ダニエル書のある部分に記されているのです。

その部分がいったいどの箇所であるかをこれから見極めますが、それには第 3 部でも学んだ「七つの雷」について書かれている次の引用文が大変に重要な鍵となります。

Bible Commentary 7 巻 971 頁 (スタディーバイブル新約 580 頁)

「七つの雷が声を発した後、小さな巻物に関して、ダニエルに命じられたように、『七つの雷が語ったことを封印せよ』という命令がヨハネに語られた。これらの事は、順序通り開かれる未来の出来事と関係がある。… 七つの雷の中で示され、ヨハネに与えられた特別な光は、第一、第二天使の使命の下で起こる諸事件の描写であった。しかし、これらの事柄を知ることは、人々にとって最善のことではなかった。なぜなら、彼らの信仰が試みられなければならなかったからである。」

この引用文に記されている最も重要な光：

「七つの雷」＝ 未来に順序通りに起こる七つの諸事件・出来事

パイオニア時代における成就：

- 順序通りに起った七つの諸事件・出来事 ＝ イエスさまが最後の贖いを始めるために至聖所に入られるまでの七つの出来事
- 人々の信仰を試す必要があったため、これらの順序通りに起こる諸事件・出来事は前もって知らされなかった。

終末時代における成就：

- 順序通りに起こる七つの諸事件・出来事 ＝ イエスさまが最後の贖いを終えて至聖所から出られるまでの七つの出来事
- 人々が前もって知る必要があるため、これらの順序通りに起こる諸事件・出来事は、イエスさまが至聖所から出られて恩恵期間が終わる前に開示される。

つまり、恩恵期間が閉じる直前に順序通りに起こる七つの諸事件・出来事が、ダニエル書のある箇所に記されているのです。

**結論：** 恩恵期間が閉じるというダニエル書の聖句は 12 章 1 節ですから、終末時代において恩恵期間の閉じる直前に開封される「小さな巻物」というのは、12:1 までに描かれているダニエル書 11:40～45 ということになります。それが「七つの雷が語った」順序通りに起こる七つの諸事件・出来事なのです。

《やはりそうだったのですね。私たちはもうすでに『ダニエル書 11 章 40 節～45 節』と『黙示録 17 章』の聖書研究のところで学んでいたもので、その箇所だろうと思っていました。そして上記の引用文 Bible Commentary 7 巻 971 頁（スタディーバイブル新約 580 頁）が、第 3 部で紹介されたところで、それだ！と確信していました》といわれる方々がほとんどではないかと思っています。実は、『よみがえる記憶』の聖書研究 9 頁と 10 頁のところでも、そのことは言及してあったのですが、気が付かっていたでしょうか？

終末時代において開封される「小さな巻物」が、ダニエル書 11 章 40 節から 45 節までの 6 節であるということなのですが、この箇所には再臨直前に次々と起る出来事が記されているだけに、サタンはエバを欺いたように、私たちにも色々な惑わしの罠を執拗に仕掛けています。これらの真理を自分のものにしておかないと、ふるいに落とされてしまいます。ではしっかりと学んでいきましょう。

ここからは、黙示録 10 章の「小さな巻物」とダニエル書 11:40~45 との関連を見ていきます。まず、ダニエル 12:1 に記されている恩恵期間が終わる前に、この「小さな巻物」は開かれるということでしたが、それはいつ頃から開かれるのでしょうか？

ダニエル書に書かれているほとんどの預言は、ウィリアム・ミラーや他のパイオニア時代の人々を通して、神さまは解き明かされました。彼らは熱心に聖書のあちこちを探り調べ、知識が増しました。しかし 11 章 40 節から 45 節は、ずっと封じられたままでした。ホワイ夫人もこの箇所についての具体的な説明は、ほとんど言及されておられません。それは、まだ恩恵期間が閉じる直前に達していなかったからではないでしょうか。その後、マーヴィン・マックスウエルを始めとする多くの有名な学者たちも、この箇所に関しては沈黙していました。また、日本においても同様で、この箇所の研究発表がなされることはありませんでした。このことは『ダニエル書 11 章 40 節~45 節』のところで説明しましたが、その部分をここで再び見ておきましょう。

《SDAの聖書研究者が参考書の一つとしてよく用いている本に、SDA神学者マーヴィン・マックスウエルが書いた“God Cares”という有名な本がありますが、そこにはダニエル書11章の40~45節に関して次のような記述があります。「ここに書かれている預言が成就され始める時まで、わからないであろう。」(God Cares v.1 297頁) この本は30年前頃に出版されたものです。またユライア・スミスの書いた本「ダニエル書と黙示録」は参考書として長年SDAの間で読まれてきた本で、ホワイ夫人も、「この本は神の手助けです」といわれているほどの素晴らしい本ですが、ダニエル11章36節あたりから45節に至るまでの解釈は、大きくズレています。参考までにユライア・スミスのこのあたりの解釈を簡単に紹介しておきます。例えば、35節までは北の王を法王制ローマと解釈していたにもかかわらず、36節では急に北の王はフランスとし、39節までの預言はフランス革命において成就されたと解釈しています(280~289頁を参照)。更に、40節では「北の王」をトルコ、そして「南の王」をエジプトと字義通りに解釈し、トルコ・エジプト・フランスの間で繰り広げられた3カ国戦争だとしています。トルコとロシアの戦い(クリミア戦争)なども含め、とても複雑な説明となっています(289~299頁を参照)。つまり、彼はこれらの預言は、1799年頃から1800年代の彼の時代に生じた軍事的な戦争として、預言はすでに成就されたという解釈です。1800年

代に再臨が来ると信じていたパイオニアたちが、そう解釈をしたのは頷けます。ですから再臨直前に起こる最後の霊的な戦いについても、そこではまったく触れられていません。このように彼の本でも、この部分については、まだ封じられたままでした。》

ところが、1980年代の後半から1990年代にかけてアメリカでこの箇所についてごく少数の SDA の間で研究発表がなされるようになりました。それが更に最近になって、アメリカではこの種の講演が SDA 教会の間でひっぱりだこになっています。またヨーロッパの主要都市の SDA 教会でもアメリカの講演者を招待しているほどです。その開かれた巻物を与えられた私たちは、その価値がどれほどのものか、ピンとこないかもしれませんね。数学者たちが何百年もかけて解こうとした数式がやっと解けたようなものであり、また物理学者が長年探していたものが、やっと見つかったようなものなのです。それほど価値のある素晴らしい神さまからの光なのです。解こうとして解けなかった人たちから見れば、何とも羨ましいことと思えることでしょう。

ただ残念ながらこれらの解釈も例外にもれず、一致が見られなくて、3つくらいの異なった解釈に分かれています。主な違いは「南の王」、「麗しい国」、「エドム、モアブ、アンモン」、「エジプト」などの聖句の解釈です。どの解釈をとるかは、一人ひとりが祈りのうちに聖句から聖句へ、そして証の文から証の文へと自分たちで学んでいくしかありません。ここでは、『ダニエル書 11 章 40 節～45 節』の聖書研究ですでに詳しく学んできた解釈をもとに、これからの学びを進めていきます。決してこれを鵜呑みにするのではなく、聖霊さまのお導きのもとに、ご自分でしっかりと研究をなさってください。きっと真理を神さまは示してくださるでしょう。その“時”がすでに来ているからです。

今までに幾度となく読んできた次の大争闘からの引用文の意味が、ここではっきりと理解できるのではないのでしょうか。

### 大争闘下 359～360 頁

「キリストのみ言葉によって弟子たちに将来がはっきり示されていたように、われわれにも将来のことが預言の中にはっきり示されている。恩恵期間の終わりに関係のあるできごとと、悩みの時のために備える働きとが、はっきり示されている。しかし多くの人々は、全然啓示を受けなかったように、これらの重要な真理を理解していない。サタンは、彼らに救いに至る知恵を与えるような感化をことごとく奪い去ろうとうかがっているのです、彼らは悩みの時に備えができていない。」

この引用文にある「恩恵期間の終わりに関係あるできごと」こそが、ダニエル 11:40～12:1 であり、それが黙示録 10 章の「七つの雷が語った」七つの出来事なのです。そして、それらは、重要な真理で、救いに至る知恵であるといっていることが解かります。では聖書に示されている順序通りに起こる七つの諸事件・出来事を、ダニエル 11:40～12:1 にそってリストしてみましょう。聖句を丁寧に一節一節お読みになり、注意深く較べながら進んでいってください。今まで以上に様々な光が見えてきて、大きな絵がより鮮明に浮かびあがってきます。繰り返しますが、このリストは私たちの聖書研究で、共にすでに詳しく学んだことを前提にしたものをまとめた“出来事”のリストですので、一節ごとの詳しい聖書研究は『ダニエル書 11 章 40 節～45 節』の方をご参照ください。

## 恩恵期間が閉じるまでの 7 つの出来事

11 章 40 節後半からスタートします。その理由は、40 節前半は 1798 年に起った法王制ローマの失墜という過去の出来事で、恩恵期間が閉じる直前に起る事ではないからです。なお、それぞれの出来事と何らかの関連がある黙示録の章も書いておきます。何故ならば、黙示録とダニエル書は一つの書で、ダニエル書に書かれているこれらのことが、必ず黙示録にも書かれているからです。ですから、それらが矛盾していない解釈であること、更に単なる結論だけの解釈でなく、聖句から聖句へ、そして証の書からの解釈でなければなりません。聖書全体の流れをいつも念頭に置いての解釈が大切となります。

### 出来事 1 : 40 節後半

ベルリンの壁・ソビエト帝国の崩壊において、終わりの時代の法王制ローマがアメリカと手を組み、共産主義・無神論主義に対して勝利する。過去におけるオスマン（オットマン）帝国の崩壊により第一天使の使命が促進されたように、この出来事が、終末時代の再臨運動を一段と促進させるためであった。（黙示録 9 章、11 章、13 章）

出来事 2 : 41 節

アメリカにおける日曜休業令法案の成立において、終わりの時代の法王制ローマがプロテスタント教・世俗主義(かつてのフランス革命時代に見られた退廃した社会)に対して勝利する。厳しい圧力に負けてしまう人々も多くいるが、神の民による「大いなる叫び」を聞き、真理の下に集められる大勢の人々がバビロンから脱出する。(黙示録 13 章、14 章、18 章)

出来事 3 : 42 節

世界における日曜休業令の法案成立において、終わりの時代の法王制ローマが世界中の様々な異教に対して勝利する。世界の宗教と政治力が、終わりの時代の法王制ローマの下で統一され、迫害が世界中に広まっていく中、各国からも人々が真理の下に集められていく。(黙示録 13 章、17 章、18 章)

出来事 4 : 43 節

更に、世界の経済力と軍事力が統一され、終わりの時代の法王制ローマが世界克服を成し遂げて完全な勝利に近づく。その結果、激しい迫害も一段と増し、売ることや買うことができなくなり、捕らわれてしまう神の民もいる。(黙示録 13 章、17 章)

出来事 5 : 44 節

それでも、真理の下に集められた神の民は、全世界からの怒りと憎しみに耐えながら永遠の福音を力強く発信し、戦いを続ける。それに対して迫害がピークに達し殉教者も続出、怒り狂った終わりの時代の法王制ローマが勝利するかのように見える。(黙示録 13 章、14 章、17 章)

出来事 6 : 45 節

しかし、麗しいキリストの義に包まれた神の民が「\*勝利の教会」として誕生、彼らは内なる愛の品性の証を全世界に宣べ伝えてこの最後の戦いについて勝利する。それを妨げようと、終わりの時代の法王制ローマが立ちはだかるが、その時、終わりの時代の法王制ローマは崩壊の道をたどり始める。(黙示録 14~19 章)

出来事 7 : 12 章 1 節

その時(=「\*勝利の教会」が誕生し、終わりの時代の法王制ローマが崩壊し始める時)、イエスさまの至聖所における婚姻・贖いが終わり、恩恵期間が閉じる。命の書に名を記された人々は皆救われる。(黙示録 15~18 章)

\*註:「勝利の教会」については、後ほど詳しく学びます。

上記にリストした7つの出来事の流れを見ますと、黙示録 10 章の大きなテーマである 大争闘が終結する前に繰り広げられる全世界における神さまの働きが描かれていることに気付きます。その最後の神さまの働きについては黙示録の様々な幻に記されていますが、順序通りには黙示録に書かれていません。それらの出来事をもっと分かりやすく、鮮明に、そして順序よく描いているのが、このダニエル 11 章です。この箇所をしっかりと、正しく理解すれば、終わりの出来事の順序に関して一致があるはずですが、「七つの雷」が語った 順序通りに起こる七つの出来事を、神さまが開示されている理由がここにあります。第 3 部で学んだように、神の民が真理を基として結束する必要があるからです。この順序通りに起こる七つの出来事については、またあとで更に学びます。

黙示録 10 章で、イエスさまが「ししのように大声で叫ばれて」開示されたこの「小さな巻物」を、私たちが深く理解する時は、“今”です。何故ならば、出来事 1 はすでに 20 年以上も前に起こり、現在私たちは、出来事 1 と出来事 2 の狭間に生きているからです。次に起こる出来事は、アメリカにおける日曜休業令であり、それは「大いなる叫び」のスタートを意味します。更にそれは「後の雨」が降り始める時でもあります。「小さな巻物」であるダニエル書 11:40~45 節が、「小さな悩みの時」という短い期間に起こる出来事を順序よく描いていることは、下記の引用文をよく読むと解かります。また、「後の雨」の正確なタイミングも、ここにはっきり書かれています。これは終末時代に関する預言を理解するうえでの重要な光であるため、アメリカでは多くの SDA 信徒たちがこの引用文をよく知っています。終末時代に起る出来事のタイミング・時期を知るうえでの鍵となりますので、しっかりと噛みしめながらこの有名な引用文を読んでみましょう。

初代文集 172~173 頁

「悩みのときの開始にあたって、われわれが出て行ってもっと徹底的に安息日を宣べ伝えたとき、われわれは聖霊に満たされた。… 『悩みの時の開始』とここに言われているのは、災害が降り始めるときのことではなくて、キリストがまだ聖所におられて、災害がくだり始める直前の短い期間をさしている。救いの働きが終了しつつあるその時、地上には悩みが起こり、諸国民は怒り狂うが、第三天使の働きを妨げないように、まだ抑制されている。その時に、『後の雨』、すなわち、主のみ前から慰めの時がきて、第三天使の大きな声に力をそえる。そして、最後の七つの災害がくだるときに、聖徒たちが立つことができるように準備を与える。」



【「悩みの時の開始」とは、いつでしょうか？】

答え：「我々が出て行ってもっと徹底的に安息日を宣べ伝える」時ですから、出来事2のアメリカにおける日曜休業令が発せられた時です。

【その時（=出来事2が起こった時）、何が与えられるのでしょうか？】

答え：「後の雨」が与えられ、われわれは聖霊に満たされます。

【その時与えられる「後の雨」の目的は、何でしょうか？】

答え：

- ①第三天使の大きな声（大いなる叫び）に力をそえるため。
- ②最後の七つの災害がくだる時（=大いなる悩みの時）に、聖徒たちが立つことができるように準備を与えるため。
- ③御霊の実が熟し品性を完成させるため。（Testimonies to Ministers 506 頁、これについては、第5部で更に学びます。）

結論：

今、私たちは出来事2でスタートを切る「小さな悩みの時」の直前に生きています。その「悩みの時の開始」と共に与えられる「後の雨」を受けるための準備は、今しかありません。

恩恵期間が閉じる直前に起こる出来事を前もって知ることは、救いに関する重要な光です。霊的にまだ眠ったままの私たちを「さあ、花婿だ。迎えに出なさい」と、ししのような大声で叫ばれて「小さな巻物」を開示され、もう時間がないことを警告されているイエスさまの悲痛な思いがここで感じられます。

更に、間違った教えに惑わされないためにも、順序通り起こる「7つの出来事」を知っておくことが必要です。例えば、「南の王」は過激派のイスラム教であるという解釈によりますと、日曜休業令や「大いなる叫び」は、44 節の出来事5で初めて開始すると彼らは教えています。そのような解釈を説いているセミナーで収録された DVD などを見ますと、40～43 節までの出来事は主に中東やアフリカ地方におけるテロ戦争を示しており、その戦争では、終わりの時代の法王制ローマの下に集まったアメリカと各国の軍事力により、イスラム過激派が全滅し、世界が統一して日曜休業令が設立する

…というような教えになっています。そのような教えを信じた場合、「テロ組織が全滅するまでには、まだ相当時間がかかるだろう。だから大丈夫。時間はまだ残っている…」と思いがちになり、準備を怠る危険が伴います。思慮の浅いおとめたちがそうでした。彼女たちのように油がないことに気付くのが遅すぎ、準備が間に合わなくなるのではないのでしょうか。

そしてもう一つ、私たちが覚えておかないといけないポイントがあります。サタンとキリストの間の大争闘は、この地上において霊的な戦いとして長い間繰り広げられてきていて、その終結が目の前に迫っています。今までサタンはこの地上にいる代理人を巧みに利用し、様々な手段を用いて神の民に対して攻撃してきました。その目的は、何とかして救いの計画を妨げ、自分がこの地球で神として崇められるようにするためです。

その霊的な戦いのクライマックスが、この「小さな巻物」に描かれているわけですが、テロ戦争だという上記にご紹介したような解釈では、国々や勢力の間で繰り広げられる軍事的な戦いが焦点となってしまいます。ダニエル 11:40～45 がまだ開示されていなかったパイオニア時代にいたユライア・スミスの解釈も、トルコ・ロシア・フランスなどの軍事的な戦争がこの箇所を中心となっています。ちなみに、他のプロテスタント教派でも、エジプトやリビヤで起った「アラブの春」がこのダニエル 11:42～43 に預言されている…と解釈する人々が出てきて、話題になりました。これらの解釈の共通点は、霊的な戦いではなく、軍事的な戦いに焦点を置いていることです。勿論恐ろしい武器を使った戦争は最後までずっと続きます（7 BC 967 頁・スタディーバイブル新約 574 頁を参照）。しかし、世界の諸国が繰り広げる軍事的な戦いは、悪と悪との戦いであって、預言の焦点ではありません。大争闘の終結における善と悪の戦いは、あくまでも「日曜日をとるか、安息日をとるか」「北の王・獣を拝するか、真の王・キリストを拝するか」という霊的な戦いです。それが聖書の主要な流れということをし、しっかりと頭に入れておくことが大切です。

ではここで、いったん黙示録 10 章に戻り、残りの 8 節から最後の聖句 11 節までを見ていきましょう。

## 見張り人

## 黙示録 10:8~11

「すると、前に天から聞えてきた声が、またわたしに語って言った、『さあ行って、海と地との上に立っている御使の手に開かれている巻物を、受け取りなさい』。そこでわたしはその御使のもとに行って、『その小さい巻物を下さい』と言った。すると、彼は言った、『取って、それを食べてしまいなさい。あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い』。わたしは御使の手からその小さな巻物を受け取って食べてしまった。すると、わたしの口には蜜のように甘かったが、それを食べたら、腹が苦くなった。その時、『あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない』と言う声がした。」

パイオニア時代における「開かれた小さな巻物」は、開示されたダニエル 8:14 にある「時」に関する預言でした。その当時の人々は、2300 年の終わりを再臨と間違えて解釈したために、輝かしい再臨運動という「口には甘い経験」をしましたが、その後、1844 年 10 月 22 日の大失望という「腹には苦い経験」をしました。

終末時代における「開かれた小さな巻物」は、ダニエル 11:40~45 だということを、今まで時間をかけて学んできました。しかし、これらの 7 つの出来事を頭に入れておく知識だけで、この箇所は終わるのでしょうか？ いいえ、聖書はさらなる光を私たちに投げかけています。ここからそれを探っていきましょう。

まず、この箇所における大切なポイントは、海と地との上に立っている御使、つまりイエスさまご自身のもとに行き、「その小さい巻物を下さい」とヨハネが直接求め、そのイエスさまの手から直接に受け取って食べたことです。すなわち、私たちも直接イエスさまのもとへ行き、「小さな巻物を下さい」と求め、受け取ってからでないと、食べることができないということです。他の人に頼らず、イエスさまご自身と直接向き合うことの重要さが、ここで強調されています。

【神さまが啓示された預言の書「小さな巻物」を食べることは、いったいどのようなことなのでしょう？】

それを知って、私たちが実際にそれを経験することが重要です。何故ならば、「小さな巻物」をとって食べることそのものが、実は、SDA 信徒に与えられた任務・使命を果た

すための必須の条件となるからです。再臨信徒はこのことをしっかりと理解しておく必要があります。では、さらなる主の導きを求めながら進めていきましょう。

ヒントは旧約聖書のエゼキエル書にあります。

新約聖書の預言者ヨハネと同じように、何と、ここにも預言者エゼキエルが巻物を食べるように命令を受けたことが述べられているではありませんか！

このエゼキエルが巻物を食べるという経験を通して、神さまは最後の民に貴重な教訓を与えようとされておられるのです。ここでも、旧約聖書と新約聖書の預言が終末時代に関連していることが解かります。エゼキエルのこの経験は単なる歴史の記述でも子供のための物語でもなく、私たち残りの民に対する神さまの温かい意図が含まれているのです。このように聖書は、光がちりばめられた宝庫です。

【では、エゼキエルの経験とは、いったい何だったのでしょうか？ そしてその経験から私たちが学ぶように計画された神さまの意図とは、何だったのでしょうか？】

それにはまず、神さまが開かれた「小さな巻物」を食べることは、いったいどのような意味なのかを理解する必要があります。ここで神さまの意図が徐々に見えてきます。

#### エゼキエル 2:9、3:1~3、14

「この時わたしが見ると、見よ、わたしの方に伸べた手があった。また見よ、手の中に巻物があった。… 彼はわたしに言われた、『人の子よ、あなたに与えられたものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい』。そこでわたしが口を開くと、彼はわたしにその巻物を食べさせた。そして彼はわたしに言われた、『人の子よ、わたしがあなたに与えるこの巻物を食べ、これであなたの腹を満たしなさい』。わたしがそれを食べると、それはわたしの口に甘いこと蜜のようであった。… (14節) 霊はわたしをもたげ、わたしを取り去ったので、わたしは心を熱くし、苦々しい思いで出て行った。主の手が強くわたしの上にあった。」

エゼキエルが命じられたとおりにその巻物を食べると、口には甘い蜜のような経験をしましたが、14節では苦々しい経験をしています。これはまるで黙示録 10章とそっくりではないですか！実は、エゼキエルはヨハネと同じような経験をしていたのです。

【いったい何が、預言者エゼキエルの経験を、甘いものから苦いものへと変えてしま

ったのでしょうか？】

エゼキエル書 3：4～11 をお読みください。そこで分かることは、神さまから受けたメッセージをエゼキエルは指示通りにイスラエルの民に伝えましたが、「厚顔で強情」(7節)な神の民は、そのメッセージを拒否し、神さまに対して反逆を犯しました。その巻物には、イスラエルの民が神さまに戻らなければ、「悲しみと、嘆きと、災い」(2:10)が襲ってくるという警告が書かれていました。神さまは愛のお方であるからこそ、何とか人々を救おうと何度も繰り返して警告されるのです。今からでも神さまに戻れば赦しはまだあるという「甘い」愛に満ちたお約束が含まれていたからこそ、エゼキエルがその巻物を食べて腹を満たした時、蜜のように甘かったのです。しかし、そのように永遠の命に関する大切な光を、イスラエルの民は拒んで受け入れなかったのです。だから、エゼキエルは苦い思いをしたのでした。

神さまが開かれた小さな巻物・預言の書を食べることの意味は、3:10～11を見ると解かります。

### エゼキエル 3：10, 11

「また彼はわたしに言われた、『人の子よ、わたしがあなたに語るすべての言葉をあなたのおさめ、あなたの耳に聞きなさい。そして捕囚の人々、あなたの民の人々の所へ行って、彼らが聞いても、彼らが拒んでも、『主なる神はこう言われる』と彼らに言いなさい。』」

自分の肉体に必要な食物は、自分で食べて消化しないと体に栄養分が行き渡らないのと同じように、預言に書かれているみ言葉を自分で読み、自分で聞き、自分で学び、そしてそれらをまず自分の心におさめてから自分で実行し、み言葉を自分で経験しないと、霊的な成長に必要な栄養を得ることはできません。つまり、み言葉を何度も何度も読み直し、聞き直し、学び直して自分のものにしなければなりません。それは知識として頭におさめるだけではなく、学んだ真理を実際の生活において反映するために、心におさめることです。そして更に、他の信徒へ学んだことを伝えることです。(Selected Message 2 巻 104 頁を参照)

相手が聞いても拒んでも、預言の書を示して「神さまはこう言われる」と伝える責任が私たちにあることを、この箇所ではっきりと述べておられます。エゼキエルのように、伝えた相手に無視されたり、拒否されたり、最後には迫害されるという「苦い」経験が伴いますが、私たちは託された責任を忠実に全うしなければなら

いのです。これこそが、神さまが私たちに要求されている尊い教えなのです。

### エゼキエル 3 : 17

「『人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの家のために見守る者（KJV “watchman”  
見張り人）とした。あなたはわたしの口から言葉を聞くたびに、わたしに代わって彼ら  
を戒めなさい。』」

預言者エゼキエルは『見張り人』として神さまによって立てられたことがこの箇所に  
しるされています。日本語聖書では「見守る者」とここで訳されていますが、KJV では  
“watchman”となっています。口語訳も新共同訳もイザヤ 21:6 を見てみると、そこでは  
同じ単語の、“watchman”を「見張り人」と訳しています。ちなみに、イザヤ 21:11～12  
では、“watchman”を口語訳では「夜回り」、新共同訳では「見張りの者」と訳されてい  
ますが、どちらも同じ意味です。

【『見張り人』になれる条件とは、何だったのでしょうか？】

それは、言うまでもなく、神さまが開かれた巻物を、自分で食べ、心におさめたこと  
でした。それと同じように、私たちも「小さな巻物・ダニエル 11:40～45」を読み、聞  
き、学び、すべて自分のものにすることこそが、『見張り人』になれる条件なのです。  
そして心におさめたメッセージを他の人々へ伝え、警告すること…それが神さまが私  
たち SDA 信徒に与えられた『見張り人』としての重大な任務・役割です。言い換えれ  
ば、「小さな巻物」を自分で食べて心におさめないと、「大いなる叫び」で人々に警告  
する任務を果たせないことになります。

9T 19

“In a special sense Seventh-day Adventists have been set in the world as  
watchmen and light bearers. To them has been entrusted the last warning for  
a perishing world.”

「セブンスデー・アドベンチストたちは、特別な意味において見張り人と光の使者と  
してこの世に置かれている。彼たちには、滅びていくこの世に伝える最後の警告が託  
されている。」

詩篇 34:8

「主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである。」

私たち一人ひとりが自分でみ言葉を食べ、その美味しい、素晴らしい主の恵みを味わい知ったなら、自然と喜びに溢れて周りの家族や友だち、そして教会員の兄弟姉妹にも伝えたくなるでしょう。ましてや、神さまのこと・近づいている再臨のこと・救いへの道のことなど全く知らないこの世の大勢の人々へも、何とか警告したいと願うのが自然な成り行きのはずです。しかし、私たちは他の人たちがみ言葉を探って食べた経験について読んだり聞いたりすることに満足し、自分で自らみ言葉を探り、食べて味わう経験が少ないために、情熱に燃えた伝道の使命が持てないまま「いつかやってくるリバイバル」を、ただ待っているのではないのでしょうか。ダニエル書や黙示録の預言を自ら深く学び、心から理解した時にリバイバルが起こることが、証の文に約束されています (Testimonies to Ministers 112~119 頁を参照)。

この「巻物を食べる」ということは、各自が実際に経験すべきものであって、言葉や文章では説明し切れない部分が多々あります。例えば、美味しい食べ物を初めて試食した時の感動を伝えたい時には、やはり言葉ではなく実際に食べてもらうのが一番ですね。み言葉の「味覚や感触」もそれと似ています。聖書や証の文に深く秘められている真理に、心が激しく動かされて衝動を受けたり、眩しいほどの光に魅惑させられる時の驚くべき感動… 皆さんにもこのようなご経験があると思います。これこそが、「巻物を食べる」ことではないのでしょうか。それをいったん経験すると、み言葉の勉強が“病み付き”になってしまい、聖書や証の書から一日とも離れられなくなってしまいます。もっとも真理が知りたくなり、全身で真理を求めるようになっていくはずで、それほどに、神さまのみ言葉には力があるのです。そして、神さまのお恵みによって与えられた素晴らしい光を、なるべく多くの方々に分かち合いたいと、心を動かされずにはいられなくなる。これが信徒伝道ではないのでしょうか？その信徒たちは、「巻物を食べる」ことによって大いなる祝福を神さまから受けるのです。

そのみ言葉を食べるのがどのような経験であるか…

一つの例として、「小さな巻物」であるダニエル 11 章に戻り、もう一度そこに書かれていることを吟味したいと思います。私たちに今最も必要なのは、聖書の知識だけでなく、今から見ていく“経験”だからです。《ということは、ダニエル書 11 章にまだ光りが秘められているということなのですか？ かなりの光を、もう理解してきたと思ったのですが…》。そうなのです。私たちに今一番大切な真理… この真理こそ

が、神さまが最も私たちにお与えになりたいもので、それがまだそこに埋まったままなのです。それを掘り出すためには、第 3 部でも触れた「神の奥義」をもう一度復習しながら理解を更に深めていきます。それほど「神の奥義」なるものは、最後の時代を生きぬく人々にとって、最も大切な学びとなるのです。あちこちに散らばっていたパズルのピースが合わさり、段々と一つの絵になっていくはずですが、そしてまもなく完成された美しい絵が、目の前に見事に浮かび上がってきます。

## 神の奥義

ここでは、第 2 部で学んだ大切な「神の奥義」を簡単に反復しながら、見極めていきましょう。

### 第 2 部で学んだ「神の奥義」のまとめ：

- 「神の奥義」とは、この地上で人性と神性が完全に結合して一体となる、すなわち、神と神の民との間の霊的な婚姻を示している。
- 黙 10:7 にある 7 番目のラッパが鳴り始めた時は、1844 年の秋で、至聖所で婚姻が始まった時である。
- 現在も 7 番目のラッパの音は鳴り続けていて、天における至聖所と地上にいる神の民の両方において婚姻が行なわれている。
- 婚姻とは、神さまの愛の力により罪や悪から離れてイエスさまに結びつき、やさしく聖なる結合を形成することである。
- 「人々を導き指導するという壮大で厳粛なキリストの働き」により、「神の奥義」の完全な成就に向けて、この地上における人性と神性の結合が現在も進行している。
- 恩恵期間が閉じられ婚姻が終わる時、人性と神性の一体化が完成し、イエス・キリストのご品性が神の民のうちに完全に形成される。
- どの時代の預言者たちもこの時を心から熱望し眠りについたが、生き残る民によっていよいよこの「神の奥義」が成就され、その直後に待望の再臨が起こる。

六千年もの間、地球上で繰り広げられてきた大争闘のクライマックスに、黙示録 10 章にある「神の奥義」という預言が完全に成就され再臨が起こることは、神さまの永遠の目的・御旨でもあり、救いの計画がついに終結することを意味しています。そして



この預言の成就こそが、人間にとっては素晴らしい良い知らせ・福音なのです。だからパウロもこの奥義を「御旨の奥義」「福音の奥義」(エペソ 1:9、6:19)と呼んでいるのです。この「神の奥義」に関する理解をもっと深めて明確にするために、証の書から引用文を一つご紹介します。

### Signs of Times 3/25/1897

"The plan that should be carried out upon the defection of any of the high intelligences of heaven,—this is the secret, the mystery which has been hid from ages. And an offering was prepared in the eternal purposes to do the very work which God has done for fallen humanity. . . .The incarnation of Christ is a mystery. The union of divinity with humanity is a mystery indeed, hidden with God, 'even the mystery which hath been hid from ages.'"

「天にいる御使いが、一人でも神から離脱した時に実行される計画—これが、代々にわたってこの世から隠されていたミステリー・奥義である。そして神の働きが墮落した人間のために成し遂げられるよう、ささげ物が永遠の目的のうちに用意された。…キリストが人間の形をとられて地上に来られたことは、奥義である。神性と人性の結合こそが奥義であり、神の(計画の)内に隠されていたのである。『その言の奥義は、代々にわたってこの世から隠されていた…』(コロサイ 1:26)」

この引用文で分かることは、

- 罪に陥った人間を救う計画が、奥義であること。
- その計画が実行されるために、ささげ物が用意された。
- ささげ物としてキリストが地上に人間の形をとって来られたことも、奥義である。
- 何故ならば、キリストにおける神性と人性の結合こそが、奥義だからである。

これを更にまとめますと、次のようになります：

救いの計画＝奥義

キリストの初臨＝奥義

神性と人性の結合＝奥義

【何故、三つともすべてが奥義なのでしょう？】

天地創造以前から、神さまのみ旨に隠されていた救いの計画が実行される為になくはならない根本的な要素は、一点の罪もない神性と人性が一体となったキリストのささげ物だったからです。この神性と人性の結合という奥義なしには、救いの計画は成立しませんでした。そして、第 2 部で学んだように、この全く一点の罪もない神性と人性の結合という奥義、つまり完全なキリストの品性が、墮落した人間の内に再現された時初めて、救いの計画が全うされるのです。何故ならば、「彼（イエスは）は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う」ためにこの地上にお生まれになったからです（マタイ 1:21）。生きたまま再臨を迎える神の民は、聖霊さまの力によってもろもろの罪に勝利し、完全なキリストの品性をとおして神性と人性の結合という奥義をこの地上において啓示します。これこそがマタイ 24:14 にある「あかし」の本当に意味するところなのです。これこそが神さまが SDA に与えられた貴重な光なのです。

そのことをふまえて、この有名なマタイ 24:14 を改めて読んでみましょう。この箇所は私たちが何度も何度も読んできましたし、また聞かされてきた聖句です。これまでの理解を超えた深い意味がここにあることが解かってきます。

#### マタイ 24:14

「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」

これは単に世界各地の隅々まで宣教師を送って伝道したり、また出版物、ラジオ、テレビ、インターネットなどによって福音が全世界に伝わり、そして終わりが来るといっただけではなく、もっともっと深い意味がここにあるのです。“イエスさまの愛に溢れた品性”が神の民によって反映され、まだ福音を知らない者たちがその愛を見て心を動かされ、キリストの教えに入っていく。これこそが本当の“あかし”であり、これが本当の意味の「御国の福音」です。バビロンから脱出した人々が、それ以前にすでに光を受け入れていた人々に合流し、真理の下に集められるのです。「そしてそれから最後が来る」のです。

## 奥義に関するもう1つの重要な聖句：

### ローマ 16:25~27

「願わくは、わたしの福音とイエス・キリストの宣教とにより、かつ、長き世々にわたって、隠されていたが、今やあらわされ、預言の書をとおして、永遠の神の命令に従い、信仰の従順に至らせるために、もろもろの国人に告知知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを力づけることのできるかた、すなわち、唯一の知恵深き神に、イエス・キリストにより、栄光が永遠より永遠にあるように、アメン。」

このローマ書で分かることは、イエスさまの宣教とパウロが宣言していた福音によって「奥義」が啓示されたことです。更にその福音は、神さまの命令によって記された預言の書をとおして、もろもろの国人に明らかにされ、人々を力づけたことが書かれています。

すなわち、初代キリスト教会において「奥義」を啓示した福音は、預言の書を通して宣べ伝えられたのでした。それと同じように、終わりのキリスト教会における福音も、預言の書を通して宣べ伝えられるのです。ですから、この福音と預言の関連をよく理解することが、とても重要になってきます。だからこそ、このテーマについて今まで学んできたのです。

ここで、覚えておきたい基本が一つあります。罪深い人間にとって救いへの道は、勿論イエス・キリスト以外にありません。100%イエスさまが成して下さる働きだからこそ、キリストの福音は良い知らせなのです。重要なのは、福音は、イエスさまが成して下さる次の三つの働きすべてが含まれるということです。そしてすべてが、神さまからの無償の賜物です。

### 福音に含まれている三つの働き

1. 私たちの代わりに成して下さった働き：十字架での犠牲＝義認
2. 私たちの為に成して下さっている働き：至聖所でのとりなしと指導＝聖化
3. 私たちの内に成して下さる働き：聖霊の力による品性の形成＝義

これら三つの働きがすべて完全に成し遂げられた時に、至聖所で働いておられたイエスさまは初めて「事はすでに成った」とおっしゃり、神の民を迎えにこの地上に来られるのです。一つでも欠けていれば、救いの計画は終了しません。この真理はとてつもなく厳粛なものであると同時に、全天においての大いなる喜びの瞬間でもあります。

## 『神の奥義』と『小さな巻物』の関連

ここで、先程学んだエゼキエル 3 章の時代背景を思い浮かべてみましょう。南王国であるユダの国は、神さまから離れて背教の道をたどってしまったため、神さまは人々への警告のメッセージを、捕囚の地バビロンで『見張り人』として召された預言者エゼキエルに託されました。そのメッセージとは、北の王であるネブカデネザルの攻撃により南王国ユダが滅亡し、聖都エルサレムと神殿が破壊されるという預言でした。すなわち、『見張り人』エゼキエルの役目は、《北の王が攻めて来るぞ！危険が目の前に迫っている！今すぐ悔い改めて罪から離れ、神に戻れ！》という緊迫した状況を伝えることでした。

これは単なるユダヤの歴史のひとつまでではないのです。私たちへの教訓のためにも、神さまはこれをエゼキエルに書かせたのです。つまり、古代イスラエルの時代と同じように、『見張り人』としてこの世に召されている私たち SDA の役目も、《終わりの時代の復活した法王制ローマ（北の王）が水面下で工作しながら、アメリカ帝国が日曜休業令を成立するように画策し、もうすでに攻めてきているのだ！危険が目の前に迫っている！今すぐ悔い改めて罪から離れ、神に戻れ！》という緊迫した状況を伝えることなのです。そのメッセージの要となる聖書の箇所が、このダニエル書 11 章の終わりの 6 節なのです！！

《アメリカの後は、世界各国も『北の王・終わりの時代の法王制ローマ』に攻められる。サタンの代理人である彼は、すべての宗教を一つにし、世界の政治力・経済力・軍事力も統一させて全世界を支配する。これが世界の日曜休業令と呼ばれるものです。しかし、最後には神さまが完全に勝利されます。これは、聖書にはっきり預言されている真実で必ず成就します。だから、偽りの王には従わず、真の王であられるイエス・キリストに従いましょう！…》という緊迫した警告をもって、これから起る再臨までの最後の出来事を順序よく説明できる箇所があるのは、このダニエル書 11 章のみです。ここで改めて「七つの雷」が語った順序通りに起こる七つの出来事の重要性が確認できます。そして、それぞれの出来事の詳細については、黙示録に啓示されており、更に理解を深めることができます。すなわち、このダニエル 11 章は、終末時代に起る場面のアウトラインです。これをしっかり頭に入れておくと、惑わされることなく現在の預言的位置を確認し、他の人々にも真理を順序よく明確に教えることができるのです。

では、終末に起こる七つの出来事を短縮して少し違った角度からもう一度吟味してみましょう。

### 最後の霊的な戦い：

出来事 1：終わりの時代の復活した法王制ローマが、アメリカと手を組んで共産主義・無神論主義に対して勝利する。

出来事 2：アメリカにおける日曜休業令法案の成立において、終わりの時代の復活した法王制ローマが、プロテスタント教と世俗主義に対して勝利する。

出来事 3：世界における日曜休業令法案の成立において、終わりの時代の復活した法王制ローマが、世界中の様々な異教（キリスト教以外の宗教）と国家に対しても勝利する。

出来事4：世界の経済力と軍事力が統一され、終わりの時代の復活した法王制ローマが、かつての暗黒時代のように、全世界に勝利する。

出来事5：迫害がピークに達し殉教者も続出し、終わりの時代の復活した法王制ローマが、完全に勝利したかのように見える。

出来事6：しかし、麗しいキリストの義に包まれた「\* 勝利の教会」として愛の品性の証を全世界に宣べ伝える神の民が、この最後の戦いに勝利し、「神の奥義」が完全に成就される。

出来事7：その時、イエスさまが、至聖所における婚姻・贖いの働きを終えられ、恩恵期間が閉じられる。

上記の七つの出来事は、大争闘の終結に繰り広げられる霊的な戦いが順序よく描写されていることを先程学びました。出来事1から出来事5までは、サタンが率いる北の王の軍勢が勝利しているように見えますが、出来事6では、イエスさまが率いる神の民の軍勢が完全に勝利し、その後すぐ恵みの扉が閉められます。

【この最後の戦いに挑み、勝利を得るためにはいったい何が最も必要なのでしょうか？】

#### 国と指導者下 326 頁

「教会はキリストの義の武具をまとって、最後の争闘を始めなければならない。『月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のよう』に、教会は全世界に出て行って、勝利に勝利を収めなければならない（雅歌 6:10）。教会と悪の勢力との闘いの最も暗黒な時は、教会が最後に救出される日の直前である。しかし、神に信頼する者はだれひとりとして恐れる必要はない。」

答え：神を信頼し、キリストの義という武具に包まれることです。そのキリストの義を信仰によって受け取り、どんな所でも、どんな時でも、どんな状況においても、いつもそれを身にまとっていることが出来るようになるのが、今私たちに与えられた準備期間における最大の課題です。そのためには、自分自身をいつもイエスさまにささげ、心も、意志も、精神も、思いも、すべてにおいてキリストと結び合うことです（キリストの実物教訓 292 頁を参照）。

キリストの義という武具をまとった神の民が、ダニエル書 11 章の最後の 6 節である「小さな巻物」に書かれている中の出来事 6でサタンの軍勢に勝利する…という時こそが、「神の奥義」が完全に成就される時なのです。ここに、「神の奥義」と「小さな巻物」の関連が秘められているのです。つまり、この地上で人性と神性が完全に結合して一体となる神と神の民との間の霊的な婚姻の完成が、この出来事 6（45 節）に描かれています。それと同じ描写は、様々な箇所にも記されていて、聖書に一貫して流れている「大きな絵」が更にくっきりと浮かんできます。

第 2 部で、婚姻の完成を黙示録 19:7,8 で見ましたが、今回は旧約聖書からも見ておきましょう。

### イザヤ 61:10

「わたしは主を大いに喜び、わが魂はわが神を楽しむ。主がわたしに救いの衣を着せ、義の上衣をまとわせて、花婿が冠をいただき、花嫁が宝玉をもって飾るようにされたからである。」

神さまに信頼を置き、救いの衣でもあるキリストの義という武具をまとった軍勢が、真理の下に集められるまでは、この出来事 6（45 節）は成就されません。だからこそ、すべてを予知される神さまは出来事 2（41 節）が起ることをまだお許しになっていないのです。何故ならば、終末時代に起こる「最終的な変動は、急速に起こる」からです（9T 11 頁）。つまり、いったん出来事 2（日曜休業令）が成就されると、まるで将棋倒しのように後に続く出来事が急速な勢いで成就されてしまうのです。一人でも多くの者が、すべての思いや感情、言葉や行ないにおいてイエスさまに 100%頼り、キリストの義をいつもまとってられる準備ができるように…という神さまの忍耐といつ

くしみがここにあります。常にキリストの義をまとうことは、常に悔い改めて示された罪を告白し、義認を持続的に経験することです。心に罪が残ったままでは、キリストの義で覆われることはできません。

### Selected Messages 1 卷 366 頁

“But while God can be just, and yet justify the sinner through the merits of Christ, no man can cover his soul with the garments of Christ’s righteousness while practicing known sins, or neglecting know duties.”

「しかし、神は義であられながらもキリストの功績を通して罪人を義認することができるお方である一方、だれ一人知っている罪を犯しながら、あるいは知っている義務を怠りながら、キリストの義の衣で魂を覆う事はできない。」

第 2 部で学びましたが、示された罪から離れてイエスさまと結び合う重要さが、ここで再び浮き上がってきます。神さまは忍耐と哀れみに満ち溢れたお方ですが、「神の奥義」が完全に成就される時を、いつまでも引き伸ばすことはできません。この地上での善と悪との闘いを終結させるまでは、救いの計画が完全に終わらないからです。

すべてをご存知の神さまが「よし」とされた時、ドラマの最終編が出来事 2 (アメリカの日曜休業令)の成就によっていよいよ始まります。今、私たちはその時を目の前に毎日過ごしているのです。

そのキリストの義をまとった軍勢について、大変興味深いことが証の書に書かれています。

### 初代文集 439~440 頁

「そして人々は、頭から足まで、武具をまとっていた。彼らは、兵卒の隊のように、規則正しく動いた。… この一団の数は減少していた。ある者は、ふるい落とされて、途中に残された。勝利と救いを尊んでそのために忍耐強く嘆願し苦悩した人々に加わらなかった不注意で無関心な人々は、それにあずからず、暗黒のうちに取りのこされた。そして、彼らの場所は、真理を信じて隊列に加わる人々によって、直ちに補充された。… わたしは、武具をまとった人々が力強く真理を語るのを聞いた。…」

この引用文の後を続けて読んでいきますと、これは「後の雨」が降る「大いなる叫び」の期間だということが明らかに分かってきます。ふるいによって軍勢の数は減りますが、真理を初めて聞く人々が直ちに隊列に加わり、その空いた場所を補充することが記されています。この激しい戦いが、ダニエル 11:41~45 に描かれているのです。



ここで見落としてならないことは、**キリストの義**という武具をまとった軍団は、ふるいによって減っていくことです。最初は皆同じように見えていた人々が、途中で二つのグループに分かれていく…どこかで聞いたことのあるストーリーではありませんか？ そうです、**十人のおとめたちのドラマ**が、この最後の戦いにおいて描かれています！

この**キリストの義**を求めるように…という福音こそが、1888年ミネアポリスの世界総会でジョーンズとワグナーによって伝えられたメッセージだったのです。それと同じ福音が、「後の雨」という聖霊の偉大な力のもとで宣言される「大いなる叫び・第三天使のメッセージ」でもあるのです。

### Testimonies to Ministers 91～92 頁

"The Lord in His great mercy sent a most precious message to His people through Elders Waggoner and Jones. This message was to bring more prominently before the world the uplifted Saviour, the sacrifice for the sins of the whole world. It presented **justification through faith** in the Surety; it invited the people to receive the **righteousness of Christ**, which is made manifest in obedience to all the commandments of God. … This is the message that God commanded to be given to the world. It is the third angel's message, which is to be proclaimed with a loud voice, and attended with the outpouring of His Spirit in a large measure."

「主の大いなる哀れみにより、ワグナーとジョーンズ長老を通して、最も尊いメッセージが神の民に送られました。このメッセージは、全世界の罪のためのいけにえである救い主を、世界を前にして顕著に高く掲げるためのものでした。それは、保証人であるお方を信じて受ける**信仰による義認**を提示し、神の全ての律法への服従として表わされる**キリストの義**を受け入れるようにと、人々を招きました。…これが、神が世界に与えよと命じられたメッセージです。これこそが、神の御霊の大いなる注ぎが伴い、大声で伝えられる第三天使のメッセージなのです。」

**第三天使のメッセージとは、信仰による義認であり、キリストの義を受け入れるようにという招きでもあります。**この素晴らしい永遠の福音を、私たちが聖霊さまのお導きによって毎日の生活において経験する時、そのメッセージは力を増し、自然と周りの人々へと溢れて出て行くのです。そして、その同じメッセージに更に聖霊の大いなる力・「後の雨」が添えられ、「大いなる叫び」として大声で全世界へと伝えられていくのです。

## 見張り人の責任

2000 年前、パリサイ人や教会の指導者たち、また彼たちの教えをそのまま鵜呑みにしていた信徒たちは、イエスさまご自身がどんなに素晴らしい光を示されたにも関わらず、彼らの霊的な目は全く見えなくなっていました。天からの父なる神のみ声も、ただの雷の音にしか聞こえなかったのです。霊的な盲目のため、真理を悟ることが出来ない状態、それは預言者イザヤの時代も同じでした。

### イザヤ 56:10~12

「見張り人らはみな目しいで、知ることがなく、みな、おしの犬で、ほえることができない。みな夢みる者、伏している者、まどろむことを好む者だ。この犬どもは強欲で、飽くことを知らない。彼らはまた悟ることのできない牧者で、皆おのが道にむかいゆき、おのおのみな、おのれの利を求め。彼らは互いに言う、『さあ、われわれは酒 (KJV:ワイン) を手に入れ、濃い酒 (KJV:ワイン) をあびるほど飲もう。あすも、きょうのようであるだろう、素晴らしい日だ』と。」

現在の私たちは、どうでしょうか。バビロンの間違った教理・ぶどう酒に酔いしれ、光が見えなくなっているのではないのでしょうか。毎週各教会で語られる指導者たちから信徒へのメッセージは、“明日も今日のように素晴らしい日だ”という耳ざわりのよいものが多く、エゼキエル書や黙示録にある厳しい警告のメッセージは、ほとんど聞かれなくなったと信徒たちの嘆く声もあります。神さまから与えられている『見張り人』の責任を、私たちは本当に果たしているのでしょうか？

証の書にはいろいろな厳しい勧告や警告が載せられていますが、ホワイト夫人は自ら好んでこれらを書かれたのではありません。彼女のメッセージに対して、多くの人々から憎しみや嘲りを受けていました。ですから、神さまから与えられた厳しい勧告や警告のメッセージを、彼女もできれば少しでも耳ざわりの良いように調子を和らげる工夫をされていたことがありました。ところが、主はそうすることは御心に反することであることを、幻の中で彼女に示されたのです。その時のことが初代文集に書かれていますが、この記述は多くの信徒がこれまでに目にしたことのないイエスさまの意外な一面が描写されていますので、紹介しておきます。

### 初代文集 158~159 頁

「主が、はじめに、神の民に伝えるべきメッセージをわたしにお与えになったときに、わたしは、それを彼らに言うことがむずかしかった。わたしはそれを何度となく耳ざ

わりよくした。そして、人々を悲しませないように、できるだけおだやかにした。主がお与えになったとおりにメッセージを伝えることは、大きな試練であった。わたしは、幻の中で、イエスのみ前につれていかれるまでは、自分が不忠実であることを自覚せず、このような行為の罪と危険を悟らなかつた。イエスは、まゆをしかめて、わたしをごらんになった。そして、わたしから顔をそむけられた。そのときに、わたしが感じた恐怖と苦悶は、書きあらわすことができない。わたしは、彼の前で、顔を伏せて倒れたが、一言も物を言う力がなかつた。ああ、わたしは、どんなにかおおいをかけられてその恐ろしいみ顔から隠されることを望んだことだろう。その時、わたしは、失われた人々が、『山よ、岩よ、さあ、われわれをおおって、み座にいますかたのみ顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ』と叫ぶ時の気持ちが、幾分か理解できた。……（159頁）天使は、再びわたしを立たせて『あなたは今こうなっているのではない。しかし、この光景が見せられたのは、あなたが、もし、主から示されたことを他の人々に伝えることを怠るならば、あなたがどのような状態になるかを知らせるためである。しかし、あなたが、もし最後まで忠実であるならば、命の木の実を食べ、命の水の川から飲むだろう。あなたは多くの苦しみに会うだろう。しかし、神の恵みは十分である』と言った。そのとき、わたしは、主がわたしに要求されることは、すべて喜んで行い、主のまゆをしかめた恐ろしいみ顔を見るのではなくて、主の是認にあずかるものとなりたいたいと思った。」

イエスさまは愛のお方です。時には子供たちとも交わり、また歌なども唄われました。民が頑固に罪から離れないために、やがて彼らが滅ぼされていくことに涙されたこともありました。そのイエスさまが、愛の方であるからと言って、私たちが頑なに罪を犯し続けたり、預言者の勧告を拒み続けたりする時にも、いつも微笑みを浮かべてそれらを見ておいでになられているかのように勝手に思っているとすれば、それは危険な甘えです。私たち親も、子供たちをいくら愛しているからといって、親の言うことを聞かないで親に反抗し、悪い行いを続ける時には厳しいことを言わなくてはならないはずです。神さまから遣わされた預言者は『見張り人』としての責任が与えられていました。それは決して軽いものではありませんでした。今の私たちにも、その責任が神さまから与えられているのです。

『十人のおとめ』の最後にイエスさまがおっしゃった「だから、目をさましていなさい」というお言葉は、今生きている私たち『見張り人』に対しての勧告です。『見張り人』の働きは常に目をさましていないと、攻めてくる敵である「北の王・終わりの時代のローマ」がよく見えなくなってしまうからです。もしかしたら私たちは、黙示録10章にある『七つの雷』が、ただの雑音としてしか聞こえなくなっているのではないのでしょうか？ だから『小さな巻物』がダニエル書のどの部分であるか…という関心すら持てないのかもしれない。

しかし、神さまは素晴らしい預言を記されています。それは、真理が見えずに滅びていく『思慮の浅いおとめ』たちの代わりに、安息日を守る大勢の異邦人たちが神の『聖なる山』に集められるという、ダニエル 11:40~45 と全く同じ場面です。これは、先程見た同じイザヤ 56 章に描かれています。

### イザヤ 56:4~7 節

「主はこう言われる、『わが安息日を守り、わが喜ぶことを選んで、わが契約を硬く守る宦官には、わが家のうちで、わが垣のうちで、むすこにも娘にもまさる記念のしるしと名を与え、絶えることのない、とこしえの名を与える。また主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守って、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は——わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈りの家のうちで楽しませる、彼らの燔祭と犠牲とは、わが祭壇の上に受け入れられる。わが家はすべての民の祈りの家となえられるからである。』」

この栄光に満ちた美しい「聖なる山」こそが、ダニエル 11:45 の出来事 6で誕生する、キリストの義に包まれた「勝利の教会」です。この素晴らしい出来事によって、「大なる奥義」が成就される時でもあり、天の至聖所における婚姻が終わる時でもあります。そして、生き残った人々は、復活でよみがえる人々と共に天国の婚宴に出席することができるのです。では、この「勝利の教会」について学んでいきましょう。

## 勝利の教会

教会とは、人類救済のために神がお定めになった機関であり、また奉仕をするために組織され、その使命は神の愛と栄光を世界に示すことである…と証の書に書かれています（患難から栄光へ上 1 頁参照）。また、世のはじめから忠実な人々がこの地上の教会を構成し、いつの時代にも『見張り人』たちが警告の使命を伝えてきたこと、更に幾世紀にもわたる迫害、闘争、霊的暗黒の時代にあっても、神さまは教会を守られてきたことも記されています（同 3 頁）。更に、「神は教会に落ちかかってくるどんな黒雲に対しても備えをし、みわざを妨害するために起こるどんな反対勢力も予見された。すべての事は神の予告通りに起こった。神は教会を見捨てておかれず、起るべきこと

を預言のことばで明らかにされた。… 真理は神の靈感を受け、神に守られている。それはすべての反対に勝利する」と、素晴らしい確証が教会に与えられているのです。そして、「教会はどんなに弱く欠陥だらけのように見えても、神が特別な意味で最高の関心を払われる対象」であり、「神の恵みの舞台」であることも約束されています（同 3～4 頁）。

その“黒雲”に包まれたような現在の SDA 教会の中は、神さまの働きを妨害する“反対勢力”が勝っているかのようにも見えます。この“弱くて欠陥だらけに見える”SDA 教会が抱えている問題にふれることは、今までの聖書研究の中で最も微妙で複雑なテーマです。それでも敢えてここで取り上げるのは2つの理由からです。「教会」について人々がどう言っているかではなくて、神さまはどのようにおっしゃっておられるか、そして何が神さまの御心であるかを聖書と証の書から私たちは知っておかねばならないというのが一つ目の理由です。二つ目は、ダニエル 11:45 で誕生する“勝利の教会”を正しく理解するために、「教会」についての学びは欠かせないからです。

では、神さまの「教会」に対する御心はいったい何なのかを探り、皆さんと共に祈りながらしっかりと学んでいきたいと思えます。

ホワイト夫人は「教会」について下記のように書かれています。これは信徒の間ではよく知られているものです。そこには、イエスさまが語られた「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである（マタイ 18:20）」という有名な聖句をホワイト夫人は引用されています。

Upward Look 315 頁 (Letter 108, Oct. 28, 1886)

“God has a church. It is not the great cathedral, neither is it the national establishment, neither is it the various denominations; it is the people who love God and keep His commandments. (Matthew 18:20 quoted.) Where Christ is even among the humble few, this is Christ’s church, for the presence of the High and Holy One who inhabiteth eternity can alone constitute a church.”

「神さまは教会を持っておられます。それは、立派な大聖堂でもなく、公共設立物でもなく、さまざま教団でもありません。それは、神を愛し、神の律法を守る人々です。（マタイ 18:20 を引用）たとえそれがわずか数人でも、キリストがおられるところがキリストの教会です。なぜならば、とこしえに住む、いと高く聖なる者のご臨在のみが、教会を構成できるからです。」

この引用文は、まだ安息日の真理を受け入れていなかったホワイト夫人の姉夫婦宛に書かれた手紙からの抜粋なのです。この引用文の前後を読みますと、たとえ世界の人々が日曜日を守り神の律法を犯して無効にしても、七日目の安息日を守り続けることの重要性を姉夫婦に訴えて書かれていることがわかります。そして上記の引用文のすぐ後には、神を愛し律法を守る人々が迫害のために荒れ果てた寂しい地・荒野・刑務所・暗い地下牢にいても、必ずキリストのご臨在が約束されていることが力強く語られています。

ですから、引用文にある「神を愛し、神の律法を守る人々」が構成する「教会」が存在する状況というのは、厳しい迫害を受けて神の民が散り散りになってしまうような時なのです。そのような過酷な状態におかれても、人間の目には決して見えない、天からしか見えない「教会」が最後まで存在するという素晴らしいお約束でもあります。

過去の歴史においても、ユダヤ教会からの迫害が増したために使徒たちは「家の教会」(ローマ書 16:5)で礼拝することを強いられました。暗黒時代においても人の目には見えない「荒野の教会」を神さまは養われました(黙 12:6、14)。

終末時代にも、人間の目には見えない“勝利の教会”が誕生するというのです。この“勝利の教会”こそが、愛の品性の証を全世界に宣べ伝えて最後の戦いに勝利し、「神の奥義」を完全に成就するのです。

しかし、現在は“勝利の教会”はまだ誕生しておらず、神さまの教会は“戦う教会”として今存在していることが、下記に記されています。

#### Testimonies to Ministers 45 頁

“Has God no living church? He has a church, but it is the church militant, not the church triumphant. We are sorry that there are defective members, that there are tares amid the wheat.”

「神さまは、生きた教会を持っておられないのでしょうか？神さまは、持っておられます。しかし、それは“戦う教会”であって、“勝利の教会”ではありません。麦と毒麦が混ざっているように、不完全な教会員がいて私たちは残念に思います。」

#### Upward Look 152 頁 (Manuscript 46, May 18, 1904)

“Those who think that the church militant is the church triumphant make a great mistake.”

「戦う教会が勝利の教会だと思っている人々は、大きな誤解をしている。」

みなさんは、この引用文にある“戦う教会”と“勝利の教会”という言葉が聞かれたことがあるでしょうか？ アメリカでも、この二つの教会の違い、特に“戦う教会”、については一般の信徒の間ではあまり知られていないように思います。日本語に訳されている証の書の中にも、たとえば、国と指導者や患難から栄光などに、出ています。国と指導者下 323 頁には、「戦う教会（原文では church militant）はしばしば、試練と苦難に会うように召された。なぜならば、教会は激しい戦いを経ないでは勝利することができないからである」とあります。これは、先ほど学んだ「教会はキリストの義の武具をまとして、最後の争闘を始めなければならない」という引用文と同じ章に記されています（国と指導者下 326 頁）。つまり、戦う教会・church militantというのは、キリストの義という武具をまとい最後の激しい戦いを経た後に、勝利の教会・church triumphantとなるのです。

患難から栄光下の 58 章（下 301 頁）にも、「真理は勝利する」という日本語タイトルに訳されて出ていますが、原文のタイトルは“The Church Triumphant”「勝利の教会」となっています。この章の 310 頁には、「教会が世に従うことをやめて、キリストの義の衣を着る時に、教会の前には、輝かしい栄光の日の夜明けがある。… 真理は、それをさげすみ拒む人たちを通り過ぎて、勝利する。ときには一見妨害されたように見えても、真理の前進は決して阻止されたことがない。神の使命が反対に会うと、神はその使命が一層大きな感化を及ぼすように、それに力をお加えになる。こうして聖なる力を備えた真理は、どんな堅固なとりでもつきぬけ、どんな障害にも勝利するのである」とあり、「勝利の教会・church triumphant」という意味は、“勝利する真理に、堅く立つ教会”だということが解かります。

質問 1: “戦う教会”や“勝利の教会”は、現在私たちが属している SDA 教会と、どのように関連しているのでしょうか？

ホワイト夫人は、組織化された SDA 教会のことを“visible church 目に見える教会”（Upward Look 63 頁）とも呼んでおられます。つまり、他の教派との境界線がはっきり引かれていて、人々の目に見える形である現在の SDA 教会が、この“目に見える戦う教会”なのです。この目に見える教会と“目に見えない勝利の教会”との関連について、信徒の間にはかなり誤解があるように思えます。実は、終末時代における教会には、二つのフェーズ・段階があるのです。それをまとめて質問 1 の答えとして一旦記しておき、更にみ言葉を検証していきます。

質問 1 の答え：

**第一段階**：1844 年以降に設立された目に見える SDA 教会は、“戦う教会”であり、「小さな悩みの時」に起るふるいにかけてられる。

**第二段階**：ふるいによって最後まで残る目に見えない教会が、“勝利の教会”である。

この「勝利の教会」を生み出す最後のふるいについて、イエスさまご自身が語られた「麦と毒麦」の譬は有名ですね。その譬を用いて、証の書には次のように書かれています。

初代文集 221 頁

「次に、わたしは、第三天使を見た。わたしと一緒にいた天使は言った。『彼の任務は、恐るべき任務である。彼は、麦を天の倉に入れるために、麦を毒麦からよりわけて印をおし、たばねる。われわれは、こうしたことに全身全霊をかたむけ、すべての注意を向けなければならない。』」

麦と毒麦をよりわけるとは、“獣の刻印を受けないように”と警告している第三天使に託されているのです。

質問 2：麦と毒麦がふるいによって最終的に分けられるのは、いつでしょうか？もう現在始まっているのでしょうか？

質問 2 の答え：まだ始まっていません。マタイ 13 章にある譬によると、収穫の時まで両方とも一緒に育ちます（30 節）。その収穫の時とは、世の終わりです（39 節）。

質問 3：では、この収穫の時・世の終わりとは、イエスさまが雲に乗って来られる再臨の時なのでしょうか？

質問 3 の答え：いいえ、恩恵期間が終わる時です。



## キリストの実物教訓 50 頁

「麦と毒麦とは、収穫までいっしょに生長する。そして、収穫というのは、恵みの時の終わりのことである。」

註：「恵みの時の終わり」という部分は、原文の英語では“the end of probationary time”とあり、正確な訳は「恩恵期間が終わる時」です。それまで、麦と毒麦は一緒に生長するのです。

毒麦は真理からふるい落とされて獣の刻印を受けますが、麦は真理に堅く立って天使にしか見えない“神の印”を額に受けます。人間の目に見える“戦う教会”は、現在の SDA 教会です。しかし、恩恵期間が終わる時に誕生する“勝利の教会”は、天から見える霊的な教会なのです。人間の目に見える組織・教団・教派ではなく、真理の一致によって結ばれた人々が形成する、目に見えない教会です。「収穫の時・恩恵期間が終わる時」が来るまでは、“戦う教会”には麦と毒麦が共存します。み言葉が定めたその時を、人間が勝手に早めて麦と毒麦を分離させることは決して許されないことです。その「麦を毒麦からよりわけて印をおし、たばねる」という恐るべき任務は、第三天使に与えられた任務で、人間に託された働きではないからです。イエスさまご自身も、「刈る者は御使たちである（マタイ 13:39）」とおっしゃいました。毒麦が沢山存在する“戦う教会”に失望して自ら分離したり、非難や攻撃の手段を用いて麦と毒麦を無理やりに分けようとすることは、神さまの御心ではありません。このことは、後ほど更に明確になります。

ここで学んだことは、終末時代の「教会」を正しく見極めるために非常に重要な真理となりますので、次に進む前に一度まとめておきます。

今存在している SDA 教会は、目に見える“戦う教会・church militant”であり、教会内には真理の一致がなく様々な教理や解釈が共存していて、麦と毒麦が混ざった教会です。この“戦う教会”は最後のふるいによって清められ、“勝利の教会・church triumphant”となるのです。この“勝利の教会”は人間の目に見える教団組織ではなく、勝利した真理に堅く立つ人々が形成する天から見た霊的な目に見えない教会です。

“戦う教会”と“勝利の教会”の違いについての真理を正しく理解することは、終末時代の大きな流れをはっきり見極めるためにとても重要なことです。これは、「教会」というテーマに限らず、預言研究のどのテーマ（例えば「神の印」「後の雨」「品性の完成」など）にも当てはまることです。一つのテーマを誤って理解していると、連鎖

反応のように他のテーマにも大きな影響を及ぼし、聖書全体に流れている預言の正しい理解が困難となり、危険も生じます。何故ならば、サタンが“狂信”という罠をあちこちに仕掛けているからです。一度その罠にはまってしまうと、そこから抜け出るのは困難を極めます。

ウィリアム・ミラーが預言研究をするように導かれ、預言に対する理解を神の天使から指導された時についての引用文を読むと、真理を一つひとつ慎重に理解していきながら学ぶことの重要性が分かります。

### 初代文集 378～379 頁

「彼に一連の真理の鎖の糸口が与えられた。そして、彼は、一つの環から次の環へと研究に導かれるにつれてついに、神のみ言葉を驚異と賛嘆の眼をもって見るようになった。彼は、そこに完全な真理の連鎖を見た。… 彼は、聖書の一部分が他の部分を説明し、彼が理解できなかった聖句は、聖書の他の部分が、それを説明していることを見出した。」

英語では“chain of truth”とあり、聖書の真理は一つひとつ鎖のように繋がっていることが分かります。たった一つの輪・真理が欠けていれば、完全な真理の連鎖が途中で切れてしまうこととなります。つまり、「教会」に関する真理、「罪」に関する真理、「聖所」に関する真理、「預言」に関する一つひとつの真理…などが正確に理解されていないと、他の聖書や証の書の解釈にも誤解や混乱をもたらしてしまうのです。ですから私たちの預言研究は、いつも聖句から聖句へ、証の書から証の書へ、真理から真理へ…と時間をかけて、完全な真理の連鎖が見れるようにいつも心がけているのです。

今の毒麦が混ざっている SDA 教会の墮落を嘆く声は多く聞かれます。そのいくつかを挙げてみます。

嘆きの声々：

- ・ 証の書を軽視、勧告や警告を無視する。
- ・ 再臨前の品性完全論を否定する。
- ・ 日曜教会の礼拝形態や教理を取り入れる。
- ・ 聖所、罪の除去、裁き…など、SDA の基本教理を教えなくなった。
- ・ 三天使のメッセージを知らない信者が増えている。
- ・ 黙示録やダニエル書…など、預言に無関心。
- ・ 健康改革・安息日の過ごし方など、ライフ・スタイルのスタンダードを下げる。
- ・ 神の愛と義のバランスが崩れ、愛だけを強調。

他にも多くの嘆き事項があり、神さまのみ言葉に従う熱心な信徒たちは、危うくなった今の教会の状態を憂い、また落胆して、教会から離れて行く人たちも見られます。アメリカでは、多くの独立（自給）伝道者が存在していますが、彼らが SDA 教会の霊的な危機を声高々に叫ぶと、教会に不満を持っていた多くの熱心な信徒たちは喝采し、アーメンを連発します。しかし、もし、伝道者が毒麦状態を強調するあまり、《今の墮落した SDA 教会は神から捨てられています。今の SDA 教会の教えは、神さまからいただいた貴重な基本教理から遠く離れてしまっています。そういう教会から出て行くべきです。私たちと共に神さまの最後の働きを成し遂げましょう！》と激を飛ばすならば、サタンはそのような動きをも巧みに利用して、信徒たちを別の危険な道へと誘導していこうとしています。どこにも危険はあります。

サムエル記上 13:1~15 に記されている出来事をお読みください。上記のような動きに、それとなく似ているところがあります。古代イスラエル人は、ペリシテ人との戦いにおいて敵にひどく圧迫され、味方が危うくなったのを見て恐ろしくなり、散り散りになってほら穴や岩の陰に身を隠しました。定められた 7 日間待ってもサムエルが現れなかったの、サウル王は散って行った兵士たちを集めて“激励”するために、サムエルに代わって主に燔祭をささげてしまいました。敵からの攻撃を恐れてバラバラになってしまった兵士をまとめて神さまに助けを祈り求め、勇気づけることは、論理的にも聖書的にも人間の目にはとても素晴らしいことに見えます。しかし、神さまはサムエルをとおして、「あなたは愚かなことをした…主の命じられた命令を守らなかった…あなたの王国は続かない…」と戒められたのです。主に燔祭をささげる役目は、祭司にだけ与えられた働きで、国家を治める政治的な指導者であるサウル王がやってはいけない働きだったからです。離れ散った民に「主の恵みを求める」ために「やむを得ず燔祭をささげた」というサウルの言い訳は、興味深いものです（12 節）。

サタンという最も恐ろしい敵との戦いにおいて、“危うくなった”教会から“離れて散って行った”熱心な福音の“兵士たち”が現在も多くいます。彼らは今の SDA 教会では余り聞けなくなった素晴らしいメッセージを、宣べ伝えています。また他の“兵士たち”もそれらのメッセージを聞きつけ、あちらこちらから彼らの下に集まってきます。それらのグループを導く指導者たちが説くメッセージは、すべて聖書と証の書を用いているので、信徒の多くは安心して聞きます。そして彼らは、それらのメッセージから大いなる祝福を受けています。しかし、問題が生じる場合もあります。カリスマ性のある指導者たちの働きが、サウルの燔祭のように人間の目にはとても素晴らしく見えても、また、彼らの教えのほとんどが聖書的であっても、もし、僅かな間違いが含まれているならば、そこにもまた大きな危険が潜んでいます。しっかりした聖書

と証の書の知識がないと、それらの間違いを真理から見分けるのは非常に困難なケースがよくあります。特に彼らの熱気溢れる集会や講演会に参加した場合、多くの人々は、その会場の雰囲気呑まれやすい状態になる可能性があります。それは、静かな自分の部屋で、一人祈りながら聖書を学ぶのとは違う雰囲気です。僅かな間違いを、たいしたことではない…と軽く考えてはなりません。ひとつでも神さまのみ言葉に反することが含まれていれば、サウルのようにそれは「愚かなこと」と神さまに見なされてしまう場合もあるのです。サウルが辛抱強く待つことをせずに、サムエルの代わりの役目を、“良い働き”として勝手に果たそうとしたように、私たちが「神さまが定められた時」を勝手に早めて、代わりの時を定め、麦と毒麦を分ける“良い働き”をしようとするのは、人間が考えている以上にとっても危険で深刻なことなのです。

そのようなグループに一旦加わってしまいますと、周りの人たちの熱心さや強い使命感などに感化され、多くの真理だけでなく、間違った教えにも染まっていく危険性があります。これは宗教の世界に限らず、どの分野にも見られる現象です。アメリカには、そういう狂信的な SDA のグループが存在しています。彼らから誘いを受けた時には一度踏み止まって、グループの教えが本当に正しい真理であるかどうかを、一つひとつ聖書と証の書から、感情に流されないで冷静に確認することが大切です。ただ現実的には、指導者たちの説得力のある説明に加え、御言葉ではなく指導者を信頼し切っているため、霊的によく見えなくなってしまうこともあります。たとえそのようなグループからやっとの思いで抜け出すことができても、そこで一旦染まった色が完全に落ちるにはかなりの時間がかかります。それほどまでに、この問題は深刻です。

その一方で、今の SDA 教会に所属してさえいれば安全だと思っている人たちも多くいます。言うまでもなく、そのような立場は、もっと危険です。サタンの罠は教会の内外に関係なく、ありとあらゆる形で仕掛けられているからです。教会内で生じている数々の問題や危険性については、『危険信号』のセクションで、具体例を挙げて詳しく学びます。ここでは、多くの人たちが誤解しているように思える一つのことにふれておきます。それは、下記の証の書を曲解して、『SDA 教会に留まってさえいれば大丈夫だ…』という考え方です。果たしてそうでしょうか？

### Selected Messages 2 卷 380 頁

"The church may appear as about to fall, but it does not fall. It remains, while the sinners in Zion will be sifted out—the chaff separated from the precious wheat. This is a terrible ordeal, but nevertheless it must take place. None but those who have been overcoming by the blood of the Lamb and

the word of their testimony will be found with the loyal and true, without spot or stain of sin, without guile in their mouths. We must be divested of our self-righteousness and arrayed in the **righteousness of Christ.**”

「教会は今にも倒れそうに見えますが、倒れません。 穀が尊い麦から分離されるように、シオンにいる罪人たちがふるい出されていく間も、それは残ります。これは恐ろしく厳しい試練ですが、必ず起らなければならないことです。小羊の血と彼らのあかしの言葉によって打ち勝つ人々のみが、罪のよごれもしみもなく、口には偽りが無い忠実で誠実な者たちとなれます。私たちは自我の義を脱ぎ、**キリストの義**を着て盛装しなければなりません。」

質問 4：たしかにこの証の書には、“教会は今にも倒れそうに見えますが、倒れません。それは残ります”と書かれています。この“倒れそうでも倒れないで残る教会”というのは、はたして、多くの人々が思っているような組織化された今の SDA 教会なのでしょうか？

この有名な引用文は、1886 年にホワイト夫人が教会の指導者宛に書かれた手紙から抜粋されています。その書かれた背景には、恩恵期間の終わりが近づいていたにも関わらず、真理を信じていると公言しながら真理に従っていない SDA 教会の深刻な状態がありました。不従順な教会のことに心を痛めていたために、ホワイト夫人は何週間もよく眠れなかった状態が続いたことが、この手紙の冒頭に綴られています。「救いとは、バプテスマを受けて教会の記録書に名前を登録することではありません（同 381 頁）」とあり、深い悔い改めを経験し、罪から離れてキリストに結びつき、『見張り人』として真理を世界中に伝えなければいけない…というようなことが、ここには何度も繰り返し記されています。

この引用文のすぐ前には、日曜休業令の法律が成立した後に、サタンはありとあらゆる欺瞞を用いて勢力を発揮しようとしませんが、最後のふるいにかけても、真理に忠実に従う神の民がいることが描写されています。この引用文では、麦と毒麦ではなく、マタイ 3:12 にある麦と穀がシンボルとして用いられていますが、意味は同じです。様々な偽りの風・惑わしの教理に吹かれて飛んでしまう穀・罪人たちは、真理からふるい落とされてしまいます。しかし、真理に堅く立つ麦＝神の真の民たちは、“勝利の教会”として最後まで残ります。彼らこそが、黙示録 12:17 に記されている真の「女の残りの子ら」なのです。その“勝利の教会”として残るための条件は、小羊の血と彼らのあかしの言葉によって罪に勝利し、キリストの義に包まれることが、上記の引用文にはっきり書かれています。これらの人々こそが、ダニエル書 11:40~45 にある最後の霊的な戦いで勝利する神の民・美しい聖山なのです。

では、上記の引用文の理解を容易にするために、ここまで学んだことを踏まえて“戦う教会”と“勝利の教会”を[カッコ]に挿入してもう一度読んでみましょう。そうすることで、この箇所の意味がいつそう明確に解ってきます。

“The church [militant] may appear as about to fall, but it does not fall. It [church triumphant] remains, while the sinners in Zion [church militant] will be sifted out—the chaff separated from the precious wheat. This is a terrible ordeal, but nevertheless it must take place. None but those who have been overcoming by the blood of the Lamb and the word of their testimony will be found with the loyal and true, without spot or stain of sin, without guile in their mouths. We must be divested of our self-righteousness and arrayed in the righteousness of Christ.”

「【戦う】教会は今にも倒れそうに見えますが、倒れません。穀が尊い麦から分離されるように、シオン【戦う教会】にいる罪人たちがふるい出されていく間も、それ【勝利の教会】は残ります。これは恐ろしく厳しい試練ですが、必ず起らなければならないことです。小羊の血と彼らのあかしの言葉によって打ち勝つ人々のみが、罪のよごれもしみもなく、口には偽りがなく忠実で誠実な者たちとなれます。私たちは自我の義を脱ぎ、キリストの義を着て盛装しなければなりません。」

質問4の答え：組織化されたSDA教会、つまり、“戦う教会”にいる大勢の穀の人たちが真理からふるい出されていくため、SDA教会は倒れそうに見えます。しかし、ふるいにかけても最後まで残っている人々に、バビロンにいた大勢の人たちが加わり、共に真理に堅く立ちます。そのふるいに残った教会は倒れることなく“勝利の教会”として、キリストの義に包まれて霊的な戦いに勝利するのです。

このように、教会の内に留まっても、教会から出て行って他のグループに加わっても、サタンは必ず落とし穴を仕掛けています。私たちがそのどちら側にいようが、サタンはいっこうにかまいません。イエスさまの時代のユダヤ教会にも、その両方のグループが存在しました。パリサイ人とサドカイ人です。今でいうところの、保守派とリベラル派です。特にパリサイ人は、見かけは素晴らしい霊的な人たちでした。この二つのグループは、いつも反目してぶつかりあっていましたが、結局は両方ともキリストを拒み、ついには、神の御子を殺してしまったのです。右か左ではなく、イエスさまが示された真ん中の真理の道こそが、唯一の道なのです。

今ユダヤ教会に少しふれましたが、ここで現在のSDA教会と比較しながら、「教会」について、更に深くみておきましょう。

## 特別な民

ここからは、聖書における「教会」の基本的な位置づけについて学んでいきます。この位置づけがいったい何であるかを明確に理解することによって、SDA 教会に対する私たちの見方や考えかたも変わってくるからです。それには旧約聖書に記されている古代イスラエルの時代にもどり、神さま自ら形成された古代イスラエルの民のユダヤ教会をまず見ます。そして終末時代に神さまが形成された霊的イスラエルの民の SDA 教会と比較することによって、大変興味深い相似点が浮かび上がってきます。

### ユダヤ教会：

1. エジプトの奴隷制度から解放され、永遠の福音を広める機関として形成された。
2. 古代イスラエルには、7日目の安息日を含む十戒が与えられた。
3. モーセを始めとする生きた預言者が立てられ、神からの証が与えられた。
4. 地上における聖所をとおして、救いの計画に関する光が示された。
5. 健康改革など、先進的な光も示された。
6. 救い主キリストの到来という、初臨に関する預言的使命を託された。
7. 神さまに似た愛の品性を世界中の人々に示す、霊的使命も託された。

### SDA 教会：

1. 暗黒時代の法王制度から解放され、永遠の福音を広める機関として形成された。
2. 霊的イスラエルには、7日目の安息日を含む十戒が与えられた。
3. エレン・ホワイトという生きた預言者が立てられ、神からの証が与えられた。
4. 天における聖所をとおして、救いの計画に関する光が示された。
5. 健康改革など、先進的な光も示された。
6. 救い主キリストの義を掲げるとい、再臨に関する預言的使命を託された。
7. 神さまに似た愛の品性を世界中の人々に示す、霊的使命も託された。

上記のリストを改めて比べてみて、神さまから選ばれたユダヤ教会と SDA 教会に、驚くほどの共通点があることが分かります。これは偶然ではなく、すべて神さまのご計画です。罪深くて弱い人間が、託された使命を全うするために必要な知恵と力を、神さまが哀れみをもってすべて備えられたのでした。その光と真理を拒まず、心から信じて受け入れ忠実に従えば、与えられた使命を成就することができるはずなのです。

旧約時代の選民・ユダヤ教会によって、ユダの部族からメシヤが誕生するという使命は果たされ、キリストの初臨は成就されました。しかし霊的な使命、つまり神さまのご品性を全世界に現わすことが出来ないまま、その使命はキリスト教会へとバトンタッチされていったのです。そして終末時代の選民・SDA 教会も三天使の使命を宣べ伝えるという預言的な使命は、神さまに今でも忠実に従っている人々によって続けられています。しかし霊的な使命、つまり神さまのご品性を全世界に現わすことができるのは、“戦う教会”として組織化された SDA 教会ではなく、霊的な“勝利の教会”によってなのです。

質問5：み言葉における SDA 教会の位置づけとは、何でしょうか？

Testimonies for the Church 7 巻 138 頁 (1902 年発行)

“Seventh-day Adventists have been chosen by God as a peculiar people, separate from the world. . . He has made them His representatives and has called them to be ambassadors for Him in the last work of salvation. The greatest wealth of truth ever entrusted to mortals, the most solemn and fearful warnings ever sent by God to man, have been committed to them to be given to the world. . .”

「セブンスデー・アドベンチストたちは、神さまがこの世から切り離して選ばれた**特別な民**です。… 神さまは、彼らを神の代表者とし、最後の救いの働きにおける神の使者として召されました。人間に託されたもっとも大いなる真理の宝庫と、神さまが人間に送られたもっとも厳粛で恐ろしい世界への警告が、彼らにゆだねられました。…」

私たち SDA は、神さまから選ばれた**特別な民**だということです。そして、SDA 教会にすべての真理が託されているということです。何ということでしょう！

ホワイト夫人がこの文章を書かれた時に “peculiar people” という言葉を用いられていますが、実はこれは、ペテロ第 1 の手紙 2 章 9 節をホワイト夫人は引用されているのです。ところがこの聖句の日本語訳は正確に訳されていません。それを見ておきましょう。

第 1 ペテロ 2:9

・口語訳：「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。…」



・新共同訳：「しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。…」

・KJV：“But ye are a chosen generation, a royal priesthood, a holy nation, a peculiar people. . .”

この聖句は、アメリカの SDA 信徒の間ではよく知られている有名な聖句です。ところが、日本語訳（口語訳、新共同訳とも）には、この“peculiar people”の“peculiar”（特別な・特有な）が省かれているではありませんか！ “Peculiar”の日本語の意味は、「これしかない、特別な・特有な」です。つまり、「他の民とは全く異なる民」であるという意味です。それともう一つ、日本語訳は「選ばれた種族」「選ばれた民」となっていますが、KJVでは「選ばれた世代（chosen generation）」となっています。

何故、この“peculiar（他とは全く異なった・特別な・特殊な・独特な）”という言葉が重要かと言いますと、古代イスラエルも“peculiar treasure”「特別な宝」として選ばれたことが出エジプト記 19:5 に記されているからです。ここでも日本語聖書には、「わたしの宝」としか訳されていません。“peculiar（他とは全く異なった・特別な・特殊な・独特な）”という言葉がここでも省かれているのです。終わりの時代の霊的イスラエルであるセブンスデー・アドベンチストが、他の民とは全く異なった“特別な民”として神に選ばれた理由は、古代イスラエルが選民となった理由と全く同じです。それは、他の民より優れているからでも数多くいるからでもなく、彼たちをご自分の宝として愛しておられたからです（申命記 7:6~8 を参照）。そして“特別な民”を選ばれた目的は、神さまの代表・使者としてこの世に福音を伝えるためでした。

質問 5 の答え：み言葉における SDA 教会の位置づけは、ユダヤ教会の位置づけと全く同じで、神さまの“特別な民”です。“もっとも大いなる真理の宝庫”として選ばれた SDA 教会は、神さまの代表・使者として “もっとも厳粛で恐ろしい世界への警告”をすべての人々に宣べ伝えることを託されました。その警告こそが、三天使の使命なのです。

## “危険信号”

旧約時代にもどって、ユダヤ教会の歴史を最初から最後までずっと見ていきますと、あるパターンが見えてきます。それは、どんなに神さまが真理と光を示され彼らを祝福されてもしばらくすると主に背いてしまい、試練に遭った時には一旦悔い改めて主に戻りますが、再び背教に向かって神から離れていく…という繰り返しです。

国と指導者上 79 頁に、「それでも、主は、彼らを主に對する忠誠に引きもどすために、なし得る限りのことをまずしたうえでなければ、イスラエルをお捨てにならなかった。… 最も暗黒の時代においてさえ、天の支配者に忠実な人々がいくら残っていて、偶像礼拝のさなかにあつてさえ、聖なる神の前に潔白な生活を送つたのである」とあります。先ほどの“戦う教会”のように、毒麦ばかりのように見えたユダヤ教会にもわずかな麦が残っていて、神さまは教会全体を見捨てることはされませんでした。その反対に、預言者をとおして次々とメッセージを送り続け、神に立ち返るようあらゆる機会をお与えになりました。

やがてその恵みの期間も終わりに近づき、神さまは、“麦と毒麦”を分けられるために人々の心を試されました。古代イスラエルの民・ユダヤ教会にとっての最後のふるいは、“キリストを選ぶか、バラバを選ぶか”の決断に迫られた時でした。バラバは自分はメシヤだと主張し、彼はサタンの代表者であったことが記されています（各時代の希望下 244、254 頁）。キリストを拒否してバラバを選んだあと、古代イスラエルの民・ユダヤ教会の恩恵期間は、ステパノを殺害した 34 AD に閉じられました。神さまが定められた最後のふるいがくるまでは、どんなにユダヤ教会が退廃しようとも、どんなに背教が蔓延しようとも、神さまは決して古代イスラエルの民をお見捨てになりませんでした。どの時代にも、主に忠実なごくわずかの人々が残っていたからです。例えば、ご降誕の知らせを御使いから受けた羊飼いたち、エルサレムの宮で幼子イエスを救い主として崇めたシメオンやアンナ、キリストを神の小羊として示したバプテスマのヨハネなど、ごく少数ではありましたが、神さまはそれらの人々を用いられ、初臨の福音を宣べ伝えました。神さまが定められた時がくる以前に、人間が勝手に《ユダヤ教会は神に背き続けてきたために、神に棄てられてしまった、もうだめだ…》などと決めることは恐るべきことで、決して許されることではありませんでした。

質問 6：現在の霊的イスラエルの民である SDA 教会の状態を、神さまはどのように見ておられるのでしょうか？ SDA 教会は、これからどうなっていくのでしょうか？もう神さまの“特別な民”ではないのでしょうか？

SDA 教会の歴史も過去から現在にいたって、ユダヤ教会の歴史とよく似たところがあります。そのことについて、ホワイト夫人は次のように警告されています。

#### Last Day Events 60～61 頁 (Letter 30 1895 年)

“In these last days God’s people will be exposed to the very same dangers as were ancient Israel. ... In their history we have a danger signal lifted before us.”

「終末時代の神の民は、古代イスラエルと全く同じ危険にさらされるでしょう。… 私たちにあるのは、危険信号として目の前に掲げられている彼らの歴史です。」

では、古代イスラエルの歴史から、神さまが私たちに与えられている“危険信号”をいくつか見てみましょう。

#### 危険信号 1 :

##### Bible Commentary 4 巻 1155 頁、スタディー・バイブル (旧約) 1013 頁

「イスラエル人が異邦の隣人と組んだ同盟は、神の特殊な民 (原文では“peculiar people”)として自分たちの独自性 (原文では“identity アイデンティティー”)を失う結果になった。」

私たちの SDA 教会も、他のキリスト教派とのかかわりにより、“特別な民”としてのアイデンティティーを失う危険にさらされています。七日目の安息日や主の再臨を信じる教派は他にも存在しますが、特に天における聖所の光は“特別な民”に与えられた最もユニークな教理です。その貴重な真理に堅く立たなければ、私たちのアイデンティティーを失うことになってしまいます。

#### 危険信号 2 :

##### 国と指導者上 46 頁

「神がソロモンとすべての真のイスラエル人の心に植えつけられた伝道の精神は、商業主義の精神に取って換えられた。多くの国々との接触によって与えられた機会は、自己の勢力を増強するために用いられた。ソロモンは通商路に要塞を築いて、彼の政治的地位を強化しようとした。」

私たちの SDA 教会も、真の“伝道精神”を忘れ、メガチャーチのコンセプトを用いたりして教会を大きくし勢力を増強し、世界のキリスト教会における地位を強化する“商業主義精神”に焦点をおく危険にさらされています。他のキリスト教派の仲間に入りたい、世界の宗教に受け入れられたいという人間的な願望を重視し、エキュメニカル運動に参加するのではなく、神さまが喜ばれる働きに目を向けるべきではないでしょうか。

### 危険信号 3 :

マタイ 23:37

「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ…」とイエスさま自ら嘆かれました。

### 箴言 29:18

「預言がなければ民はわがままにふるまう (KJV:滅びる) …」

KJV では、“Where there is no vision, the people perish”、となっていますので、正確な訳は「預言がなければ民は滅びる」です。

古代イスラエルのユダヤ教会が滅びた大きな原因は、預言者たちのメッセージに耳を傾けず、無視したり否定したことです。神さまの使者である預言者を拒否したことは、神さまご自身を拒否したことになります。その結果、彼らに託された“神のご品性を世界に現わす”という霊的使命を全うする特権は、異邦人たちに託されていきました。

私たちの SDA 教会も、神さまの使者である預言者エレン・ホワイトのメッセージに耳を傾けず、無視したり、否定する危険にさらされています。《証の書はもう古いのです。時代は刻々と変化しています。それに合わせて教理や教えも変わっていくのです》ということを知ったことがあります。証の書が古くて今の時代にそぐわないものであるならば、聖書はその何倍も古いものです。やがてすべての信徒はふるいにかけて、十人のおとめのように、“思慮深いおとめ”と、“思慮の浅いおとめ”に分かれていきます。神さまからの“証の書”を拒否することは、神さまご自身を拒否することです。その結果、神さまの御心から離れつつあり、170 年たった今もまだ背教の道をさまよい続けているのです。古代イスラエル人と同じように、悔い改めて真理の道に戻ることをこのまま拒否し続ける SDA たちは、最後のふるいによって滅びの道に陥ってしまいます。そして、“神のご品性を世界に現わす”という霊的使命を全うする特権は、「大いなる叫び」によって集められる多くの“異邦人”を含む、“勝利の教会”に与えられるのです。

古代イスラエルの歴史をとおして与えられたこれらの“危険信号”が見えないため、SDA 教会が同じ危険にさらされていることにさえ全く気付かない人々が大勢います。もう一方では、証の書を熱心に読み、神さまの御心に従っている人々は、その流れを何とか変えようとして、「神さまが定められた真理の道に戻りましょう！」と必死に訴えています。しかし哀しいことに、証の書に忠実な信徒の中には、教会から疎んじられたりしている人たちもいます。

私たちは、現在のように墮落した状態にある教会は、黙示録に書かれてあるラオデキヤ教会であることを知っていますが、実は、1863 年に SDA 教会が教団として設立されるずっと以前から、そのような状態はあったのです。例えば、神さまは、SDA 教会がラオデキヤ教会になってしまったことを幻でホワイト夫人に告げられ、悔い改めて神へ戻るようにと厳しい勧告が 1857 年に書かれています (1T141~146 頁)。しかし、教会の状態は一向に改善せず、まるで SDA 教会は神さまからすでに“見捨てられてしまった”と思われるような描写が、教会が発展していくと共に続いています。そのことを、「キリストは教会から去られ、聖霊は消されてしまった… 教会はサタンに麻痺されている…」と、SDA 教団が設立されてからまだ 5 年後の 1868 年に書かれています (2T 439~442 頁)。また、1909 年には、「多くの者たちが眠っている間に、サタンは異端の教理を持ち込もうと休まずに働いている… でも主は私たちに天国を閉ざされていない (RH 11/18/1909)」ともあり、神さまはまだ救いの手を差し伸べておられたことがわかります。

それから 100 年以上もたった現在の SDA 教会の状態も、ずっとぬるま湯にどっぷり浸かったままのラオデキヤの状態なのです。聖書には、ラオデキヤ教会が 7 番目で最後の教会であることをはっきりと記されています。別の教会・団体・組織を神さまが設立されることは、決してないのです。このことは、このテーマの研究が進むにつれて更に明確になってきます。神さまが定められた最後のふるいがくるまでは、人間の目から見てどんなに現在の SDA 教会が墮落しようとも、どんなに背教が悪化しようとも、神さまはその時までは、決してお見捨てになりません。神さまはまだわずかに残っている忠実な人々を用いられて、キリストの再臨に関する福音を今でも宣べ伝えておられます。その神さまが定められた時がくる以前に、人間が《SDA 教会はすでに神に棄てられた…》などと勝手に決めることは恐るべきことで、決して許されることはありません。イエスさまご自身「熱心になって悔い改めなさい (黙 3:19)」とラオデキヤ教会に、神に立ち返るようにと、あらゆる機会をお与えになっています。

そして、神さまは、セブンスデー・アドベンチストを“peculiar treasure”「他とは全く異なった特別な宝」として、終わりの時まで任命されたことが、はっきり証の書

に書かれています。

### Selected Messages 2 巻 397 頁 (1908 年)

“I am instructed to say to Seventh-day Adventists the world over, God has called us as a people to be a peculiar treasure unto Himself. He has appointed that His church on earth shall stand perfectly united in the Spirit and counsel of the Lord of hosts to the end of time.”

「私は、世界中のセブンスデー・アドベンチストたちに宣べるよう命じられたことがあります。それは、神さまが私たち民をご自分の特別な宝として召集されたことです。神さまが地球における神の教会に任命されたことは、終わりの時までみ霊と万軍の主のみ胸において完全に結束して立つことです。」

しかし、SDA 教会にも最後のふるいの時がまもなくきます。

SDA 教会の最後のふるいは、ユダヤ教会が試された “キリストを選ぶか、バラバを選ぶか” のように、“キリストを選ぶか、偽のメシア・サタンの代表者である獣を選ぶか” つまり、“安息日を選ぶか、日曜日を選ぶか” の決断に迫られる時です。それ以前に SDA 教会の恩恵期間が閉じ、墮落した SDA 教会から出なければあなた方は救われない… というようなメッセージは、神さまからのものではありません。

先ほど学んだ証の書の「“戦う教会”は“勝利の教会”でなく、麦と毒麦が混ざっている」とある Testimonies to Ministers 45 頁は、1893 年に書かれたもので、“The Remnant Church Not Babylon (残りの教会はバビロンではない)” の章から抜粋しました。これは、当時の Review and Herald に連載された記事で、組織化された最後の教会は SDA 教会であり、他の組織や教派を神さまが形成されることは決してないことが明確に記されています。更に、SDA 教会のことを、混乱して墮落したバビロンと見なし、離れるように…というムーヴメント(運動・働きかけ)は間違いで、サタンの働きであることが、同じ記事に何と 9 回も繰り返し厳しい言葉や表現を用いて警告されています。SDA 教会を非難したり攻撃して、自ら教会から離れていくことがどんなに間違っているか、それがどんなに重い責任か…などが伝わってきます。英語が理解出来る方は、是非この章全体をお読みになってください。

それと合わせて、大争闘下 38 章「世界への最後の警告」371~383 頁も、是非もう一度お読みになってください。特に、371~375 頁には、黙示録 18:1~5 の出来事が詳しく

述べられていて、「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」という預言がいつ成就するかが、鮮明に描写されています。「彼女」とは、バビロンと呼ばれるところの背教した日曜教会のことです。1844年に起った「真夜中の叫び」で一旦成就されましたが、完全な成就是「大いなる叫び」を聞き、真理に従ってバビロンから大勢の人々が脱出する時だとはっきり書かれています。日曜休業令が発せられたあと、「安息日が忠誠の大試金石となる(375頁)」時です。それ以前に、この預言の成就是ありえないのです。

例えば、1888年のあとから1900年の初めにかけて、特にホワイト夫人が亡くなられた1915年の後、《背教が進んだ SDA 教会の恩恵期間が閉じてしまい、そこから離れなければならぬ…》という預言の解釈が SDA 信徒の間で説かれていました。現在でも、SDA 教会から出て行き、安息日を守り証の書を用いている改革派に加わった人たちは、《今の SDA 教会は、真理から離れてしまいました。恩恵期間がすでに閉じられた SDA 教会から出て来るように！》とか、《今は「大いなる叫び」の時であり、「後の雨」が降っていて私たちはイエスさまと同じ完全な品性を持つことができます…》と証の書を曲解して説いたりしています。ホワイト人が生きておられた1890年にも、証の書を誤用した似たような運動が起こり、それらのムーヴメントを受け入れるならば、「the greatest fanatical excitements that has ever been witnessed among Seventh-day Adventists、今までセブンスデー アドベンチストたちの間では見られなかった、最も狂信的な興奮を伴う行動(1SM 179頁)」に発展してしまうことを警告されています。ですから、ここでも、私たちは再臨直前の出来事をしっかりと理解しておくべきであり、冷静に判断する必要があるのです。

では、SDA 教会から出て新しい組織を形成することを、神さまはどう思っているかを見ておきましょう。

### Selected Messages 2 巻 389～390 頁 1905 年

"After the passing of the time, God entrusted to His faithful followers the precious principles of present truth. ... Those who passed through these experiences are to be as firm as a rock to the principles that have made us Seventh-day Adventists. ... Every truth that He has given for these last days is to be proclaimed to the world. Every pillar that He has established is to be strengthened. We cannot now step off the foundation that God has established. We cannot now enter into any new organization; for this would mean apostasy from the truth."

「時が過ぎた後〔1844年過ぎた後〕、現代の真理の貴重な原則を、神さまは忠実な信者たちに託されました。… これらの経験を通った人々は、セブンスデー・アドベンチストを作り上げた原則に、岩のように堅く立たなければなりません。神さまから与えられた終末時代に関するすべての真理を、世界に宣言しなければなりません。神さまが設立されたすべての柱を、強化しなければなりません。今になって私たちは神さまが設立された土台から降りてはなりません。今になって私たちは、どんな新しい組織にも参加すべきではありません。それは、真理から背教することになります。」

上記は 1905 年に書かれ、セブンスデー・アドベンチストたちに託された真理を、最後まで忠実に世界中に宣べ伝えるようにと訴えたものです。SDA 教会以外の組織や団体に参加することは、何と神さまの目には真理からの背教と見なされてしまうのです。神さまが定められた最後のふるいがやって来る前に、SDA 教会を自ら去ることは神さまのみ心ではありません。

しかし、一旦最後のふるいが始まると、日曜休業令という法令に背くことで直面する迫害や刑罰を恐れて妥協して真理から離れ、SDA 教会を去っていく信徒たちが続出することが、預言されています。

### 大争闘下 378 頁

「あらしが迫って来るとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められてなかった多くの者が、その信仰を棄てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっている。そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般うけする側を選ぶのである。」

最後のふるいでセブンスデー・アドベンチストが信仰を棄てて反対側に加わるということは、七日目の安息日を棄てて日曜日を選ぶということです。迫害や刑罰を避けるために日曜日を主の日として神さまを礼拝することは、もうセブンスデー・アドベンチストではなくなるということです。大勢の SDA 信徒たちが安息日の真理を棄てるから、“戦う教会・SDA 教会”が今にも倒れそうに見えるのです。でも妥協しない SDA 信徒たちは“勝利の教会”として残ります。そこに、バビロンから脱出してくる人々も安息日の真理を受け入れ、“勝利の教会”に加わって来るのです。



質問 6 の答え：現在の墮落している SDA 教会 は、終わりの時まで任命された“特別な民”ですが、神さまは口から吐き出したほど酷い状態のラオデキヤ教会と見なしておられます。この 7 番目のラオデキヤ教会が最後の教会であって、別の団体・組織が設立されることは聖書の預言に一切記されていません。ラオデキヤ教会が最後のふるいかけられ、後に残るのは目に見えない“勝利の教会”のみです。日曜休業令に従って獣の刻印を受ける…という背教が起こる時まで、ラオデキヤ教会に神さまの恵みがまだ差し伸べられています。

### どうしたらよいのでしょうか？

しかし、現実には SDA 教会の中は“麦と毒麦”が混ざった状態ですので、国や地域によって差はあるでしょうが、教会は様々な問題を抱えています。そのために、教会に対する信徒の不満がつよっていることが、世界中の多くの教会で見られます。その問題の最も原因となっているのが、“証の書をどう受けとめているか”であることは、誰もが知っています。今の教会に失望して心を痛めている信徒から聞えてくる主な不満というのは、《教会の指導者たちが、間違った教理を勝手に教会に持ち込んで信徒に説いている。そして証の書にある勧告を無効にしようとしている… これでは教会の中に混乱と不安を生じさせるだけです》というものではないでしょうか？

証の書を心から信じている人々の主張の方が聖書的であり、また筋が通っています。何故ならば、終末時代の“特別な民”である SDA 教会に与えられた最もユニークな特徴は、イエスのあかし・預言の霊であることがはっきり聖書に記されているからです（黙 12:17、19:10）。他のキリスト教会には与えられていないこの賜物を否定することは、それをお与えになった神さまを否定することになり、とても恐ろしいことです。ですから、証の書が預言のみ霊であることを心から信じてバプテスマを受けた人々にとって、この問題が深刻なものとなるのは当然のことです。しかも、この“麦と毒麦”が共存する状態は、先ほど見てきたように、最後のふるいの時まで続くのです。

質問 7：教会内の“み言葉の飢饉”に悩んだり、神さまに従って真理に立つことで教会から疎んじられたり、追い出された場合は、いったいどうしたらよいのでしょうか？

三天使のメッセージを高く掲げながら忠実に真理を説いている教会（特に、最も保守的なところとされているここミシガン州をはじめとする地域）が、いまだにアメリカには結構存在しているため、SDA 教会に毎週出席していて真理に堅く立つ信徒たちはまだ多く残っています。しかし、地域によっては教会での背教があまりにも蔓延しているため、家族、特に子供たちを連れて教会に出席できないという人々もわずかながらいるようです。他にも様々な理由があると思いますが、教会に行かない彼らはいったいどのように安息日の礼拝をしているのでしょうか？

だいたい次のような中から選択をしているようです。

- 一つの SDA 教会に毎週出席するのではなくて、あちこちの SDA 教会に出席する人々
- 3ABN (Three Angels Broadcasting Network)、HOPE Channel などが放映する、テレビ番組を見ながら、一緒に“礼拝”する人々
- 数家族集まって“home church・家の教会”を設立し、自分たちで礼拝する人々
- インターネットやスカイプの“教会”に出席する人々
- 他の教会組織に加わっていく人々…

など、様々なかたちで神さまを礼拝しておられるようですが、ここで、覚えておかなければならない大切なポイントがいくつかあります。

- 1) マタイ 13:25 には、「人々が眠っている間に敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った」とあります。教会や集まりがどんなに小さくても、あるいはどんなに大きく発展しようとも、また他の教派、組織、グループに行こうとも、信徒たちが油断して居眠りしている間に、必ずサタンが毒麦の種を蒔きに入りこんでくるということです。宗教的な集まりや団体が、たとえ人間の目には一見麦ばかりの集まりに見えたとしても、“絶対に安全”ということはありません。やがて偽りの教えが、毒麦によって気付かないうちに侵入してきます。SDA 教会の中にも、外にいても、どこにいても、常にサタンからの疑惑に惑わされる危険が伴います。

ちなみに、アメリカには、SDA 教団以外に自給伝道（英語では Self-Supporting Ministry とか Independent Ministry）と呼ばれているミニストリーが数え切れないくらい多くあります。自給伝道ミニストリーというのは、SDA 教団という組織から完全に分離して、自主的に組織的な教会とか伝道活動を運営していくグループです。その中には、“反教団”という旗を掲げて信徒に SDA 教会から離れることをあおるグループがありますが、それは先ほど学んだように神さまのみ心ではありません。けれども、教団の働きをサポートしながら素晴らしい働きを続けているグループもあります。そのように教団側とうまく調和させながら伝道している自給伝道ミニストリーは、もちろん神さまの“特別な民”の一部です。たとえば、年間何億ものトラクトをアフリカ大陸などに配布するための出版事業を主にやっているミニストリーとか、世界中の未開拓地への開拓伝道や医事伝道などを展開しているミニストリーなどもあります。つまり、教団も自給伝道ミニストリーもお互いに協力すれば、更なる伝道への大きな道が開かれる可能性もあるのです。

- 2) 第2テサロニケ2:10~11には、「真理に対する愛」を神さまから受けていないと、あらゆる偽りの力に負けてしまうことが書かれています。たとえ、他の組織の教会に加わったり、インターネットで礼拝をしたりする場合であっても、気をつけなければならないことは、そこで教えていることが聖書の真理かどうかをしっかりと見極めることです。彼らの教えがすべて正しいように思えても、ほんのわずかな間違いが見分けられなかったために、致命傷になってしまう可能性が非常に高いことを知っておくべきです。真理を愛する心を、常に神さまに求めることが不可欠です。そして、真理を知的に理解することだけではなく、真理をしっかりと心の奥深くに留めて、毎日の生活に反映させることです。頭で知っているだけの真理には力がなく、周りの雰囲気や他の人々からの影響、そして刺激的な興奮や感情に容易に流されてしまいます。
  
- 3) 神さまは、ヘブル4章で「神の安息にはいること」について貴重な光を私たちに教えておられます。「安息日の礼拝」とは、どのような意義があるのか！…という重要な真理を、各自でしっかりと学んでおくことが大切です。安息日と他の六日間とは、私たちが思っている以上に大きな差があります。どのように安息日を神さまと共に過ごすかは、最後のふるいを直前にした私たちにとって、最も大切なテーマの一つです。

- 4) イエスさまがゲッセマネで「わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい（マタイ 26:39）」と祈られたように、どこでどのように神さまを安息日に礼拝するかは、私たちがどうしたい…ではなく、神さまの私たちへのみ心は何か…ということを切に求めることです。礼拝の焦点はあくまでも神さまであり、人間ではありません。その神さまが一番喜ばれることを求め、選ぶべきです。
- 5) ヘブル 10:24~25 には、「愛と善行とを励むように互いに務め、ある人たちがいつもしているように、集会をやめることはしないで互いに励まし、かの日が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか」とあります。すなわち、“かの日・再臨”が近づくにあたり、ますます神の民は集会に集まり、主の働きに励み、お互いに励ましあうことが、神さまの御心です。

それぞれの状況や立場は人によって異なり、それは本人にしかわかりません。ですから、どうしたらよいか…の答えは各自が熱心に祈り、聖霊さまのお導きによって見出していくしかないと思います。他の人たちが決めることではなくて、本人と神さまとの関係によって決めることではないでしょうか。

聖書を見てみますと、イエスさまの下に集まった 12 弟子の中にも、ユダという毒麦が混ざっていました。ユダは、他の弟子たちを混乱させるような疑惑や議論、意見や解釈を持ち込んだり、弟子たちの間で争いを引き起したとあります（各時代の希望下 219~220 頁）。しかし、イエスさまは問題をもたらず毒麦を抜こうとはされず、最後まで愛と哀れみをもってユダに接し、自ら彼が去っていくまで救いの手を差し伸べました。更にイエスさまは、弟子たちと新しい“教派”を設立するようなことはされなくて、毎週安息日にはひどく墮落していたユダヤ教会に出席し、暗闇に包まれていた神の民へ真理の光を照らされたのです。

もし、教会内で教理を統一させるために、すべての信徒がそれらを信じ従うよう要求し、強制するならば、人間の目には毒麦のない麦ばかりの教会に見えるかもしれませんが、それはキリストの精神ではなく、サタンの精神です。その間違った精神によって権力を振るってきた教会こそが、カトリック教会です。SDA 教会は神さまの教会だからこそ、麦の中に毒麦が混ざることをお許しになるのです。真の愛は、決して相手を強いることはしません。イエスさまも、真理がまだ理解できていなかった弟子たちを責め、自ら教えられた教理を信じるように強いて命じたり、服従を強要されることはされませんでした。そして、イエスさまが弟子たちの心に蒔かれた真理の種は、

十字架の後やっと芽生え、弟子たちもユダヤ教会に留まり大勢の人々に福音を伝えました。福音を受け入れた人々の中には、キリストを十字架につけたユダヤ人や祭司たちもいたのです。使徒行伝にもそのことが書かれています。「…エルサレムにおける弟子の数が、非常にふえていき、祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった」（使徒行伝 6:7）。こうすることが、今の私たち SDA 信徒にも与えられている働きではないでしょうか。

イエスさまが、最後まで愛と哀れみをもって“毒麦のユダ”に救いの手を差し伸べられたところに、秘訣があるのではないのでしょうか？ 私たち一人ひとりが聖書を深く学び、素晴らしい光を心に留めて真理に従い、教会から離れたり、教会には残っていても真理から離れている私たちの家族や友人のために、熱心に祈ることが求められているのではないのでしょうか。そして、いよいよ最後のふるいが起り激しい迫害が始まった時、一旦 SDA 教会から出て行った多くの人々が、イエスさまのみ声を聞いて戻ってくるという素晴らしいお約束もあります（6T 401 頁）。

ここでもう一度旧約聖書に戻り、神さまから離れて背教の道をたどっていたイスラエルに、預言者として立てられたエリヤを思い出してみてください。エリヤはイザベルに殺されることを恐れて逃げ、“もう死んでしまいたい！”とまで願っていました。“神さまにまだ忠実なのは、自分一人だけだ”とひどく落胆し、ほら穴に逃げ隠れていたエリヤに、神さまは「バアルにひざをかかめない七千人」がまだ残っていることを静かな声で語りかけ、勇気付けられました（列王記上 19:1~18 を参照）。やがて主の働きを全うしたエリヤは、死を経験することもなく天にのぼっていきました（列王記下 2:11）。

そのように、神さまは今も、世界中に散らばっている「七千人」に、聖霊の静かな声をとおして語り、勇気付けられているのではないのでしょうか。聖書の真理に従っている人たちは、私たちが思っている以上に現在の日本の SDA 教会の中にもまだ残っていると思います。自分の周りの狭い視野にだけに焦点をおくことは危険です。耳に入ってくる様々な教会の情報や目に見える状況、またそれらによって生じる感情に頼ると、エリヤのように不安になったり失望したり、教会から逃げ出したくなってしまうかもしれません。ほら穴に隠れていたエリヤに、「あなたはここで何をしていますか。出て行って私の働きを成し遂げなさい…」と神さまが語られたように、私たちにも語りかけておられるような気がします。私たちが頼れるのは、人間が出来るわざではなく、み言葉に記されている神さまのお約束のみです。エリヤと同じように、大争闘が終結する場面で主の働きを全うする“勝利の教会”には、死を経験せずに天にのぼる

という私たちの想像を絶するほどの素晴らしい特権が与えられているのです。現在の SDA 教会に残って忠実に働く信徒が、勝利の教会の一員になることが次の証の書に、明確に書かれています。

Evangelism 707 頁 (1892 年)

“The work is soon to close. The members of the church militant who have proved faithful will become the church triumphant.”

「働きはまもなく終わります。忠実な者であることを証明した戦う教会の信徒たちが、勝利の教会となります。」

“迫害”によって教会から追い出されるのは別として、自ら SDA 教会を出るのではなく、実はその全く反対のこと、つまり SDA 教会に残ることを神さまは私たちに求められておられるのです。私たちは「その中（エルサレム＝教会）で行なわれているすべての憎むべきことに対して嘆き悲しみ」、「心をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもって」神に帰りましょう…と人々に心から訴え、祈り続けなければならないのです（エゼキエル 9:4、ヨエル 2:12）。

質問 7 の答え：どこで、どのように神さまを礼拝するかは、個人と神さまとの間にある“良心の問題”ですので、各自が熱心に祈り、聖霊さまのお導きによって見出していくしかありません。私たちは、それぞれに違う場所や状況に置かれていて、神さまは一人ひとりに適した『見張り人』としての働きを与えてくださいます。その責任がどんなものであるか必ず教えてくださいますので、祈って求めることが大切です。

## 「教会」についてのまとめ

- 神さまは、SDA 教会を終末時代の“特別な民”として選ばれ、三天使の使命を世界すべての人々に宣べ伝える使命を託された。
- 現在の SDA 教会は「戦う教会・church militant」で、麦と毒麦が共存しているため、様々な問題を抱えている。
- しかし、今も神さまは必死の思いで救いの手を伸ばされ、悔い改めて真理に立ち返ることを熱望されている。

- 「戦う教会・church militant」に残り、忠実に働く信徒が「勝利の教会・church triumphant」の一員となる。
- 最終テストである日曜休業令（第三天使のメッセージ）によって、毒麦・もみ殻は真理からふるい落とされ、最後に残った尊い麦とバビロンから脱出してくる人々が「勝利の教会・church triumphant」を形成する。
- このテストがくる前に、人間が勝手に毒麦と麦を分離しようとすることは許されていない。それは、サタンの働きである。
- SDA 教会以外の組織や団体に参加することは、真理からの背教と見なされる。
- イエスさまが模範を示されたように、背教しているように見える指導者や信徒に対しても、愛と哀れみを持って“戦う教会・church militant”において真理を伝え続けるのが『見張り人』としての使命である。
- それらの真理が拒否されたり無視されても、真理の種を蒔き続け、芽が出るように忍耐を持って祈り続けることが、私たちの役目である。
- ある一定の教派・組織・グループとの繋がりに関わらず、イエスさまのみ声が語る真理に従い、キリストの義に包まれている人々だけが、再臨まで生き続ける最後の霊的な“勝利の教会・14万4千人”として残る。
- この“勝利の教会”こそが、ダニエル 11:45 に登場する「美しい聖山」である。

### 最後に…

今回の第4部では、「小さな巻物」であるダニエル書 11:40～45 を中心に様々なトピックについて学びました。特に、私たち SDA は『見張り人』として世界中の人々に最後の警告をし、キリストの義に包まれること以外に救いは一切ない…という永遠の福音を伝える大きな使命が託されていることを見てきました。その責任を果たすための第一条件は、み言葉を自分で読み、自分で聞き、自分で学び、そしてそれらを自分の心におさめて自分で実行し、み言葉の偉大なる力を自分で経験することです。しかし、時間を費やしてじかにみ言葉を探ることをせず、どうしても他の人間に頼る傾向があるのが現実ではないでしょうか。聖霊だけを頼りにして、み言葉を何度も読み直し、聞き直し、学び直して自分のものにすると、神さまのご臨在で心が深く満たされます。その結果、自然と他の人々へも力強く、愛をもって真理を伝えることができるようになるのです。ですから、この聖書研究で一旦うめてきたパズルのピースをすべてまたバラバラにし、ご自分で納得いくまでみ言葉と照らし合わせながら、何度も何度もやり直して見てください。

そして、『見張り人』のセクションのところで学んだエゼキエルのように、伝えた相手に無視されたり、拒否されたり、“迫害”を受ける「苦い」経験が伴うかもしれません

が、私たちは『見張り人』として神さまから託された責任を忠実に全うしなければなりません。相手が聞いても拒んでも、預言の書を示して「神さまはこう言われる」と伝える責任が私たちにあることを覚えておくべきです。

ただ、その方法が鍵となります。もろ刃のつるぎよりも鋭くて力のある生きたみ言葉をやたらに振り回すと、ペテロのように相手の耳を切り落としてしまい（ヨハネ 18:10）、もう相手に聞いてもらえなくなる危険があります。たとえそのような状態にすでになっても、イエスさまはその耳を癒してくださることもできます（ルカ 22:50～51）。やはり、マタイ 10:16 にある「へびのように賢く、はとのように素直（KJV では harmless=無害・害を与えない）であれ」と、イエスさまが教えられた方法以外にありません。暗闇を追い払う手段は、聖霊さまの導きのもとで明るい光・真理を照らすしかないのです。相手の非を指摘したりすることで、自分では真理を伝えているつもりでも、かえって相手の心に害を及ぼしてしまうこともあるからです。イエスさまの愛と慈しみに満たされた心から自然と溢れてくる生きた真理のみ、相手の心を揺さぶる力があるのです。

私たちがどこに住んでいようとも、心をひとつにして真理を学び、分かち合う…というこの“信徒によるバトンタッチ伝道”は、神さまがおっしゃる『見張り人』の一つの働きではないかと思っています。聖霊さまのお導きに頼り、お互い励まし合いながらこれからも主のみ業に励んで行きたいと心から祈っております。

次回は、今度こそ最終篇の『真夜中の叫び・第5部』となります。